



地域研修報告書

2018



写真上から、寿都漁港にて（寿都町/1部水野谷ゼミⅠ・Ⅱ）、除染土壌等を詰めたフレコンバッグが積まれた仮置場（福島県田村市都路地区/1部早尻ゼミⅠ・Ⅱ）、かみしほろ情報館見学（上士幌町/1部濱田ゼミⅠ・Ⅱ）

1 ……『地域研修報告書』の発行にあたって

1 ……地域研修ガイダンス

2 ……地域研修1年間の流れ・研修地一覧

4～26 ……地域研修ゼミ報告（2018年度 地域研修Ⅰ・Ⅱ 参加21ゼミ 計343名）

4	1部浅妻ゼミⅠ・Ⅱ 地域経済における森林資源の位置づけの変化 研修地／津別町・小樽市		17	2部濱田ゼミⅠ・Ⅱ 産炭地域における小規模自治体が直面している人口 対策の課題 研修地／歌志内市	
5	2部浅妻ゼミⅠ 資源・エネルギーからみる地域の歴史と現在 研修地／安平町・小樽市		18	1部早尻ゼミⅠ・Ⅱ 原子力災害に向き合う山村の過去、現在、未来 研修地／福島県田村市都路地区（旧・都路村）	
6	1部内田ゼミⅠ・Ⅱ 平取町の「ニシパの恋人」とリーダーのライフヒストリー 研修地／平取町		19	1部平野ゼミⅠ 浜松市におけるフェアトレードタウン運動の調査 研修地／静岡県浜松市	
7	2部内田ゼミⅠ・Ⅱ 平取町の「アイヌ文化振興」とリーダーのライフヒストリー 研修地／平取町		20	1部古林ゼミⅠ 野生生物の保護と鳥獣被害に対する対応の実態を学ぶ 研修地／えりも町	
8	1部大貝ゼミⅡ アニメは地域を活性化できるのか？ 研修地／洞爺湖町		21	1部古林ゼミⅡ 水俣病の教訓と現状を学ぶ 研修地／熊本県水俣市	
9	1部佐藤（信）ゼミⅠ・Ⅱ 十勝における農産物ブランド化の現状を明らかにする 研修地／帯広市・音更町		22	1部水野谷ゼミⅠ・Ⅱ ふるさと納税制度によるまちづくりへの影響 研修地／寿都町・岩内町	
10	1部・2部川村ゼミⅠ・Ⅱ 学生アルバイトをめぐる問題 労働組合、労使関係 研修地／札幌市		23	1部宮入ゼミⅠ・Ⅱ 北海道酪農の現状と課題―足寄町を事例に― 研修地／足寄町	
12	1部徐ゼミⅠ・Ⅱ 外国人観光客誘致の実態調査@旭山動物園 研修地／旭川市		24	2部宮入ゼミⅠ・Ⅱ 水田農業地域の現状と農協の役割 研修地／南幌町	
14	1部中園ゼミⅠ 母子世帯の現状と子どもの進路の課題 研修地／札幌市		25	1部山田ゼミⅠ 札幌のナイトタイムエコノミーの可能性について 研修地／札幌市	
15	1部西村ゼミⅠ・Ⅱ 学生との協働によるトヨコロ創生プロジェクト 研修地／豊頃町		26	1部山田ゼミⅡ 岩見沢市の観光による地域活性化について 研修地／岩見沢市	
16	1部濱田ゼミⅠ・Ⅱ ふるさと納税と移住・定住対策 研修地／上士幌町				

27 ……地域研修報告会（準備と当日）

2018 年度 『地域研修報告書』の発行にあたって

北海学園大学経済学部 古林 英一



1950年、北海学園大学の前身北海短期大学が設立され、その2年後、北海道最初の4年制私立大学北海学園大学が設立されました。この時期、まだ北海道大学に経済学部はありませんでした。つまり、わが北海学園大学経済学部は道内で最も歴史のある経済学部なのです。

北海学園大学建学の精神は開拓者精神ですが、設立当初は経済学部だけの単科大学でしたから、これはすなわちわが経済学部の建学の精神に他なりません。爾来、経済学部の多くの卒業生が北海道の発展を担ってきました。地域の発展に寄与し、地域の発展を担う人材を育てることが私たち北海学園大学経済学部のミッションとでもいいでしょう。実際、道内の企業・官公庁などで、北海学園大学経済学部の卒業生のいないところはそう多くはないでしょう。

発足以来半世紀以上を経た2003年、経済学部は経済学科と地域経済学科の2学科体制となりました。地域研修は地域経済学科発足と同時に開設された科目です。「学びの場はキャンパスだけではない」が基本コンセプトです。自治体、企業、地域住民など、地域社会を構成する様々な主体に直接アプローチし、そこから学ぶのがこの地域研修です。まさにわが北海学園大学経済学部のミッションを具現化する科目とでもいいでしょう。

訪問先は、北海道に限定されることなく、日本全域に広がっています。現在はネット社会です。玉石混濁の様々な情報が渦巻く社会です。ともすれば、私たちはインターネットを通じて得られる情報で社会を知ったような錯覚に陥りがちです。

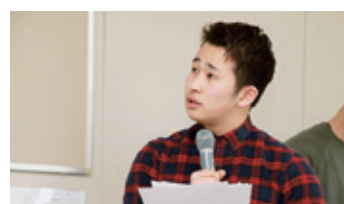
しかしながら、AIがいかに発達しようと、社会は人間が構成するものです。生身の人間の行動によって社会は動いているのです。社会の現場に直接触れ、自ら行動することによって、学生自身の五感を通じて得られた体験や知見は、ネット情報では決して得られることのない豊富な内容を有しています。まさに「百聞は一見に如かず」です。ネット社会の現代こそ、このことがより重要性を増しているといえるでしょう。

本報告書は、わが北海学園大学経済学部の学生諸君が、瑞々しい感性で自らの五感を通じて体得した体験・知見の一端を収録したものです。

最後になりましたが、地域研修実施にあたり、多大なご協力をいただいた関係各方面の皆さまには厚くお申し上げます。皆さま方のご尽力で、学生たちが大きく成長することができたと確信いたしております。

また、何かの機会にこの冊子を読まれた高校生みなさんが、進路決定にあたり、この冊子を契機として、私たち北海学園大学経済学部を志望してくれるなら、これにまさる喜びはありません。私たちは地域を担う意欲を持つ若者を待っています。

地域研修ガイドンス | 2018年4月21日 50番教室



地域研修1年間の流れ

地域研修は夏休みに行われる現地研修と、事前学習・事後学習・報告会でのプレゼンテーションから構成されます。教室での経済学・地域経済学関連の講義から学んだことと、地域のリアルな実態を結びつけて理解するために、複合的な要素から構成した実践的な科目です。

4月 ● 地域研修ガイダンス

地域研修担当教員から当該年度の地域研修に関するガイダンスを受けます。

5月 ● 事前学習（研修テーマなどの決定）

ゼミ担当教員の指導のもと、ゼミ単位で研修対象地域の社会、経済状況などについて、自ら収集した資料によって、研究対象地域の概要を勉強します。

8月 ● 地域研修実施

おおむね夏休み後半から10月初旬にかけて現地研修を行います。現地研修では自治体・関連団体・企業などからのヒアリング、施設見学、アンケート等の実態調査、フィールドワーク、などを行います。

10月 ● 事後学習

ゼミ担当教員の指導の下、研修成果をまとめます。また予定される地域研修報告会に向けて準備を行います。

12月 ● 地域研修報告会

地域研修の成果に基づいて研修レポートを作成し、ゼミ単位で発表を行い研修成果をゼミ相互で確認しあいます。

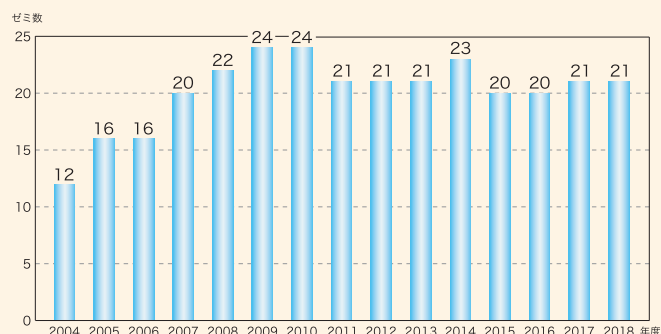
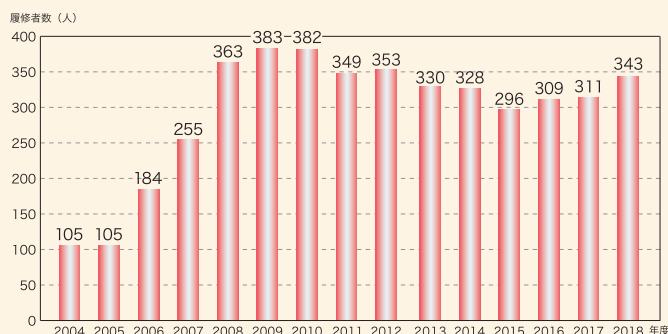
3月 ● 地域研修報告書の作成

地域研修報告会の研修レポートをもとに、研修の成果を報告書としてまとめます。



①② 地域研修ガイダンス。③④ 各ゼミによる現地研修。⑤⑥ 事後学習と報告会へ向けての準備。
⑦⑧ 地域研修報告会でのゼミ発表と質疑。

地域研修履修者数と実施ゼミ数



研修地一覧



上川総合振興局管内

A 旭川市 徐ゼミⅠ・Ⅱ

空知振興局管内

B 歌志内市 2部濱田ゼミⅠ・Ⅱ

C 岩見沢市 山田ゼミⅠ

D 南幌町 2部宮入ゼミⅠ・Ⅱ

オホーツク総合振興局管内

E 津別町 浅妻ゼミⅠ・Ⅱ

十勝総合振興局管内

F 足寄町 宮入ゼミⅠ・Ⅱ

G 上士幌町 濱田ゼミⅠ・Ⅱ

H 音更町 佐藤ゼミⅠ・Ⅱ

I 帯広市 佐藤ゼミⅠ・Ⅱ

J 豊頃町 西村ゼミⅠ・Ⅱ

K 札幌市

川村ゼミⅠ・Ⅱ、2部川村ゼミⅠ・Ⅱ、
中園ゼミⅠ、山田ゼミⅠ

後志総合振興局管内

L 小樽市 浅妻ゼミⅠ・Ⅱ

2部浅妻ゼミⅠ・Ⅱ

M 岩内町 水野谷ゼミⅠ・Ⅱ

N 寿都町 水野谷ゼミⅠ・Ⅱ

胆振総合振興局管内

O 安平町 2部浅妻ゼミⅠ・Ⅱ

P 洞爺湖町 大貝ゼミⅠ

日高振興局管内

Q 平取町 内田ゼミⅠ・Ⅱ

2部内田ゼミⅠ・Ⅱ

R えりも町 古林ゼミⅠ

田村市都路地区 早尻ゼミⅠ・Ⅱ

浜松市 平野ゼミⅠ

水俣市 古林ゼミⅠ・Ⅱ



1部 浅妻裕ゼミ I・II

参加学生数 30名



浅妻 裕
経済学科
教授



ペレット工場前にて

地域経済における森林資源の位置づけの変化 研修地：津別町・小樽市

●研修目的

津別町は林業・林産業が町の基幹産業であり、国内最大手合板企業や特定の製品で圧倒的なシェアを誇る企業が立地するほか、バイオマスエネルギーの活用も盛んである。明治期から現在に至るまで津別町経済にとっての森林資源の重要性を学習する。

研修先・日程

- 10月10日 小樽港湾事務所、小樽市総合博物館（本館）、小樽市総合博物館（運河館）
- 10月15日 津別町役場産業振興課ヒアリング、丸玉木材株式会社、津別単板協同組合バイオマスエネルギーセンター視察・ヒアリング、国鉄相生線の役割について津別町役場OBへのヒアリング、津別ペレット協同組合工場視察・ヒアリング、地域おこし協力隊へのヒアリング、中小企業家同友会オホーツク支部担当者からの講話
- 10月16日 山上木工工場、TSKOOL視察・ヒアリング、津別営林署OBへのヒアリング、相富木材加工工場視察・ヒアリング、資料収集、フィールドワーク

●総括

成果は以下の3点にまとめられる。まず、現在の「愛林のまち」へと至る入植以来の黎明期を知ることができたことである。1910年前後の開拓当初、立木は開墾の障害であったが、大正期には鉄道枕木用材等として次第に造材事業に用いられるようになった。当時は積雪を搬出に、融雪を流送に利用する冬山造山が中心であった。流送は網走に向けて網走川で行われた。流送人夫が丸太を操って運び、極めて危険な仕事であったという。

次に、鉄道の開通が製材業を生み出したことである。1925年、国鉄相生線が全通し「林産資源を地元で加工して、付加価値もろとも貨車積みして広く道内外へ」（『津別町100年史』）輸送することが可能となった。周辺には、製材工場や合板・経木・鉛材工場などが次々に立地した。昭和2年には津別森林鉄道も敷設され、伐出や各集落への生活必需品の輸送が行われた。鉄道とともに町は発展してきたのであり、それゆえ、1985年の廃止後にも、大規模な鉄道遺産が大切に保存されている。

3つ目は、大正末期にはじまる歴史を有する各企業が、ユニークな取り組みを行いそれぞれの製品市場において重要なポジションを占めていることである。また、「環境のまち」を目指す町の施策とも連動し、未利用木材を利用したバイオマス発電やペレット製造など、新たな付加価値創出への取り組みが盛んに行われている。なお小樽市でも関連事項を学んだ。

学生研修記

平田 琴音
経済学科2年
北広島高校出身



橋本 悠希
経済学科3年
大麻高校出身



地域課題解決における企業の役割

津別町は、森林資源が豊富で、かつては林業や製材産業などが発達していたが、若者が町を離れ産業の担い手が不足するなど、地域経済の持続性が問われている。訪問先の山上木工のTSKOOLという施設では、津別町の廃校になった小学校を再活用し、椅子や机等の商品の展示・販売を行っているほか、「ものづくり教室」事業を計画するなど、来訪客の増加を促す取り組みを行っている。合板製造の丸玉木材では、余剰となった木屑をもち、「コージェネレーションシステム」で作られた電気で、施設の全ての電力を賄い、残った余剰電力は北海道電力に売りその利益を「育林支援」として地元へ還元している。このように地域課題に対して、町の政策だけではなく、企業等の地域諸主体が積極的に関わっていることや、その手法として、森林資源をバイオマスエネルギーとして活用していることがわかった。

地域の特徴を生かした再生への取り組み

今回の地域研修では、地方だからこそできる暮らしや経済活動があることを学んだ。現在、日本の各地域で著しい人口減少が進んでいる。若者が減り、人手不足が深刻化し、学校や公共施設の遊休化も進行している。一方で、土地や施設を地域の再生に活用できる可能性が広がっており、また、人が地域に入ってくる仕掛けについて創意工夫を行いやすいという条件もある。実際、津別町では「道の駅あいおい」（旧日本国有鉄道北見相生駅）で、かつて木材輸送を行った鉄道車両の保存をしているほか、「くまやき」を名物にして活性化を図っている。また、地域外の若者の協力も得て、中心部の空き家をコワーキングスペースとしてリノベーションしコンパクトな賑わいのある街を目指している。地域の特徴を生かした取り組みが行いやすいことや、人同士の距離が近いことなどが津別町の魅力であることがわかった。

写真①小樽市博物館にて幌内鉄道開通の様子をみる。②津別町役場ヒアリング。③町内に残る腕木式信号機。④「さんさん館」にてヒアリング。⑤津別森林鉄道。⑥道の駅あいおい（鉄道公園）にて。



2部 浅妻裕ゼミⅠ

参加学生数6名



浅妻 裕
経済学科
教授



「土の会」「地域おこし協力隊」の皆様と

資源・エネルギーからみる地域の歴史と現在

研修地：安平町・小樽市

●研修目的

安平町は、量や種類が豊富な森林資源の活用や、石狩炭田と室蘭を結ぶ石炭資源の輸送拠点として発展してきた。現在では国内有数の太陽光発電所の集積地域となっている。資源・エネルギーの生産・輸送の観点から安平町のこれまでの歴史を捉える。

研修先・日程

- | | |
|--------|---|
| 8月28日 | 安平町産業経済課、北海道電力南早来変電所、土の会、安平町地域おこし協力隊 |
| 8月29日 | 安平町追分SL保存協会（追分公民館）、ソフトバンク苫東安平ソーラーパーク、安平町商工会（追分地区） |
| 10月10日 | 小樽港湾事務所、小樽市総合博物館（本館）、小樽市総合博物館（運河館） |

写真①「アピレンジャー」の紹介。②広大な追分駅構内。③SL保存協会へのヒアリング。④広大なソーラーパークの中で。



●総括

安平町（南の早来地区・北の追分地区）の開拓が始まったのは明治20年代で、道央の石炭を室蘭に輸送する「室蘭本線」の開通が契機である。早来地区にはカシワやミズナラなどの落葉広葉樹の伐採を目的として人々が入植した。明治後期には三井物産が町内から室蘭本線早来駅までの木材（国内外の枕木・角材用）輸送のために「馬車鉄道」を敷設し、生産が加速された。また、安平の木材は高品質で「早来炭」というブランド品となり、市民の生活を支え、工業用として本州へも移出された。早来は大正期に至るまでに森林資源の供給・輸送拠点として発展を遂げた。一方、追分地区は、周辺炭鉱の石炭を室蘭に運ぶための輸送拠点（蒸気機関車基地、貨物列車の解結）として拓かれ、1970年代に鉄道が「無煙化」されるまで、ほぼ一貫して「鉄道の街」であった。その後、早来地区については、森林資源の枯渇等により従来の役割を終え、追分は炭鉱の閉山、機関区の廃止により、衰退期に入った。これに対し、高度成長期末期には苫東開発の関係で町南部の沼地が改良



南早来変電所大型蓄電システム前にて

されたが、計画が進展しない中で土地は荒地へとになっていった。近年、広大なこの土地を含め、早来地区に太陽光発電所の建設が急速に進んでいる。基幹産業の農業が担い手不足等で課題を抱える中で、主たる産業として期待されている面もある。これらのことを町史や各団体資料、ヒアリング、土地利用の変遷を示す地図、報道資料などから把握した。小樽では港湾や鉄道の発展と町の発展の関係について学習した。

学生研修記

上杉 沙矢香
経済学科2年
札幌啓成高校出身



「輸送」で発展してきた町への町民の愛着

今回の研修で、安平が資源輸送で発展した町という歴史から、住民が町に愛着を持っていることがわかった。2019年、安平町に道の駅「D51ステーション」がオープン予定であり、そこでは地元で愛されていた蒸気機関車（SL）の静態保存のほか、安平町の魅力の一つでもある菜の花から作った商品を販売する。SLを中心に据えつつ、地域の生産物を用い、地域活性化に繋げるという取り組みである。また、町の魅力を伝えるために「馬車鉄道」の歴史の掘り起しなど郷土史に関する取り組みを行う「土の会」が存在することを知った。現在安平町は、太陽光発電所の一大集積地、さらに再エネ普及促進のため、道内への送電の拠点であるが故に当地に設置された「大型蓄電システム」で注目されている。私は、今回の研修から、それまでの経緯には様々な歴史があることを知り、大変勉強になった。

大島 慧
経済学科2年
札幌東陵高校出身



小樽は北海道のゲートウェイ

今回、地域研修で小樽港や鉄道が北海道の発展に重要な役割を果たしていたことを学んだ。元々小樽港周辺はニシン漁場であったが、1880年の幌内鉄道開通により、幌内炭鉱から鉄道で運ばれた石炭を国内外へ輸送する拠点となった。小樽港は山に囲まれた天然の良港であり、石炭輸送が盛んになる頃、波がくる方向に防波堤を建設した。廣井勇（小樽築港事務所初代所長）が様々な試行錯誤から外面からの波に堪えうる構造・材質を研究し、実用化したものである。約100年も前のことだが、今もなお同じ形で残っている。小樽港には、米やわらなどが本州から運びこまれ、また明治末期には石炭を上回るニシンの出荷港として北海道経済の発展に寄与した。私はこれまで観光でしか小樽に行ったことがなく、観光で発展した街であるとの印象を持っていたが、実はそれは小樽の歴史の中のごく一部でしかなく、ということがわかった。

1部 内田和浩ゼミ I・II

参加学生数 16 名



内田 和浩
地域経済学科
教授



学内にて

平取町の「ニシパの恋人」とリーダーのライフヒストリー 研修地：平取町

●研修目的

本地域研修では、前期のゼミで学んだ質的調査法を用いて、平取町におけるまちづくりのリーダー（ここでは「ニシパの恋人」を生産する農家の中心メンバー）3人へのライフヒストリー法による聞き取り調査を行い、そのまちづくりへのプロセスを明らかにしようとした。

研修先・日程

- 8月27日 事前学習(大学にて) - ライフヒストリー調査の質問項目についての確認と地域研修全体の打ち合わせ
- 8月28日 平取町役場にて川上満町長より「平取町の総合計画とまちづくり」について説明を受ける(1部2部ゼミ合同)
JAびらとり第一選果場を見学。JA職員から説明を受ける。
ライフヒストリー調査Ⅰ①②③(平取町立中央公民館内)
遠藤副町長ら学園大OBの役場職員と懇親会(1部2部ゼミ合同)
- 8月29日 グループ毎にテーブル越し作業(平取町立中央公民館内)
- 8月30日 平取町二風谷地区のフィールドワーク
ライフヒストリー調査Ⅱ①②③(平取町立中央公民館内)

写真①川上平取町長の講話。②川上平取町長の講話(学生が質問)。③④びらとり農協選果場見学。⑤ライフヒストリー調査。⑥二風谷アイヌ文化博物館の見学



●総括

前期のゼミでは、「質的調査法の基礎」を学ぶとともに、新聞記事から優れたまちづくりの実践を紹介し合った。そして、地域研修には平取町での「ニシパの恋人」というトマト生産のブランド化として有名な取り組みを選んだ。

地域研修では、初日に平取町役場で川上町長から直接「平取町の総合計画とまちづくり」について話を聞くとともに、「ニシパの恋人」出荷拠点であるJAびらとり第一選果場を見学しJA職員から説明を受けた。夜は、学園大OBの遠藤副町長ら役場職員とびらとり牛を食べながら懇親会を行った。そして、個々のリーダーへの聞き取り調査では、それぞれ2回にわたる聞き取り調査を行った。リーダーたちが、何を考え、どんな経験や出会いから学び、どんな実践に取り組んできたのか、そして今後どんなことを展望しているのか。まさに、質的調査法を用いてそのプロセスを明らかにしようとする取り組みだ。学生たちはこれらを通じて、平取町に住み農業によるまちづくりに取り組む人々と直接出会い、直接話を聞き、直接体験し、「地域で暮らす」とはどういうことなのかを少しでも理解することが出来たと思う。

お世話になったすべての皆さんに感謝したい。

学生研修記

小柳 雄貴
地域経済学科 2年
広尾高校出身



千保 美乃
地域経済学科 2年
苫小牧西高校出身



地域研修を終えて

私たちのゼミは、地域研修で平取トマト「ニシパの恋人」について調査しました。最初は何をすれば良いのかわからない状態でしたが、まずは3グループに分かれて平取町の農業の歴史について調べ、町の農業の特徴や主な出来事をまとめてから地域研修に向かいました。初日は昼頃に平取町に着いて、町長の講話を聴き調査を始めました。調査方法はライフヒストリー法で、3人の重要人物の話を聞き「ニシパの恋人」の発展過程の調査を行いました。2日目は朝から昼まで文字おこしを行い、夜は1部・2部のゼミメンバーと役場の学園OBや調査に協力いただいた方々で平取和牛や黒豚の焼き肉をして、楽しくお話をしました。3日目は、足りない情報をもう一度調査し、確認した後札幌へ帰りました。地域研修では事前準備ではわからない現場の声を聞くことができ、私たちの調査も奥の深いものとなりました。

平取町での質的調査

私たちは平取町へ質的調査を踏まえ、まちづくりを調査するために平取町の特産品であるトマトを切り口にリーダー層3名へ聞き取り調査を行いました。

事前学習では、平取町が現在までどのようにしてまちづくりに取り組んでいたのか、トマトの生産量がどのように推移しているかなどをゼミ全体で理解し共有しました。その上で地域研修に臨みましたが、3名それぞれの視点から新しい情報や地域社会の実像、また今後の課題を知ることができました。1日目の聞き取り調査で見えてきた事実や、より深めたい話題などを2日目に生かしていくなど内容の濃い時間を過ごせたと思います。また、トマト選果場の見学や伝統文化であるアイヌ博物館にもいくことができました。

今回の研修を通して普段の学習ではできない地域づくりにおける深い部分まで探求することができ、今後の分析にも力を入れていきたいです。

2部 内田和浩ゼミ I・II

参加学生数 17 名



内田 和浩

地域経済学科
教授



平取町中央公民館にて

平取町の「アイヌ文化振興」とリーダーのライフストーリー

研修地：平取町

●研修目的

本地域研修では、前期のゼミで学んだ質的調査法を用いて、平取町におけるまちづくりのリーダー（ここでは「アイヌ文化振興」に関わる二風谷地区の中心メンバーと役場職員 3 人へのライフストーリー法による聞き取り調査を行い、そのまちづくりへのプロセスを明らかにしようとした。

研修先・日程

- 8月27日 事前学習(大学にて)ライフストーリー調査の質問項目についての確認と地域研修全体の打ち合わせ
- 8月28日 平取町役場にて川上満町長より「平取町の総合計画とまちづくり」について説明を受ける(1部2部ゼミ合同)
平取町立二風谷アイヌ文化博物館を見学。館長から説明を受ける。
ライフストーリー調査Ⅰ①②③(平取町立中央公民館内)
遠藤副町長ら学園大OBの役場職員と懇親会(1部2部ゼミ合同)
- 8月29日 グループ毎にテーブル越し作業(二風谷アイヌ文化博物館)
- 8月30日 平取町二風谷地区のフィールドワーク
ライフストーリー調査Ⅱ①②③(二風谷アイヌ文化博物館)
JA びらとり第一選果場を見学。JA 職員から説明を受ける。

写真①川上平取町長の講話。②川上平取町長の講話(学生が質問)。③聞き取り調査(チセの中で)。④聞き取り調査。⑤フィールドワーク(選果場)。⑥フィールドワーク



①



②



③



④



⑤



⑥

●総括

前期のゼミでは、「質的調査法の基礎」を学ぶとともに、新聞記事から優れたまちづくりの実践を紹介し合った。そして、地域研修には平取町二風谷地区での「アイヌ文化振興」に関わる取り組みを選んだ。

地域研修では、初日に平取町役場で川上町長から直接「平取町の総合計画とまちづくり」について話を聞くとともに、「アイヌ文化振興」の拠点である平取町立二風谷アイヌ文化博物館を見学、館長から説明を受けた。夜は、学園大OBの遠藤副町長ら役場職員とびらとり牛を食べながら懇親会を行った。そして、個々のリーダーへの聞き取り調査では、それぞれ2回にわたる聞き取り調査を行った。リーダーたちが、何を考え、どんな経験や出会いから学び、どんな実践に取り組んできたのか、そして今後どんなことを展望しているのか。まさに、質的調査法を用いてそのプロセスを明らかにしようとして取り組んだ。学生たちはこれらを通じて、二風谷地区に住みアイヌ文化の振興と伝統の継承によるまちづくりに取り組む人々と直接出会い、直接話を聞き、直接体験し、「地域で暮らす」とはどういうことなのかを少しでも理解することが出来たと思う。

お世話になったすべての皆さんに感謝したい。

学生研修記

窪田 隼也

地域経済学科 2 年
滝川高校出身



小林 勇太

地域経済学科 3 年
網走南ヶ丘高校出身



地域研修を通して

私たち内田ゼミナールに所属するゼミ生は、2018 年度の地域研修として平取町を訪問した。平取町はトマトやアイヌに関連したものなどが有名である。その中でも私たち 2 部生は、平取町のアイヌに関連した取り組みに深く関わる 3 名に対して聞き取り調査を行った。この聞き取り調査では、インターネットなどだけでは知ることのできないことを沢山知った。平取町に住むアイヌの人々が何を思い、悩み生きてきたのか、アイヌの文化を多くの人に知ってもらうため取り組んでいること、それらを支えるために地域がしてきた取り組みなどを知ることができた。

地域研修は、事前学習やまとめ作業などを含め大変なものだった。しかし、実際にその場へ赴き何があったのか・行われているのか当事者たちの口から直接聞くことのできる貴重な機会であり、この体験は自分の身になる決して無駄になるものではないと感じた。

平取町を訪れて

今回の地域研修は、アイヌの伝統が色濃く残る地域である平取町二風谷を訪れ、まちづくりのリーダー層へ聞き取り調査を行い、そのプロセスを明らかにした。私は、平取町役場アイヌ施策推進課職員の方に聞き取り調査を行い、まちづくりのリーダー層へどのようなサポートをしているのかを学んだ。

平取町は農業を中心としたまちづくりのほか、アイヌ文化の保存・伝承する拠点として、二風谷アイヌ博物館・二風谷工芸館の管理運営、アイヌ語教室の開催、平取地域イオル再生事業などといった普及・啓発活動を行っている。アイヌ施策推進課は、資金援助や、文化継承体系の構築などのサポートをしている。また、平取町で暮らすアイヌ人の方々には、生活相談窓口や住宅資金補助などの支援を行っている。

この地域研修で、実際のまちづくりに触れることができ、大変有意義なものとなった。

1部 大貝健二ゼミⅡ

参加学生数8名



大貝 健二
地域経済学科
准教授



TOYAKOマンガ・アニメフェスタ実行委員会の皆さんと

アニメは地域を活性化できるのか？ 研修地：洞爺湖町

●研修目的

新たなツーリズムの形態として、アニメ聖地巡礼が脚光を浴びている。洞爺湖町は「天体のメソッド」で、霧弥湖としてアニメの舞台となっている。本研修では、アニメ聖地の効果に加え、TOYAKO マンガ・アニメフェスタについて、その現状と課題について調べることとした。

研修先・日程

- 7月5日 TOYAKO マンガ・アニメフェスタ
洞爺湖温泉観光協会
洞爺湖町役場観光振興課
アニメ聖地巡礼①
- 7月6日 洞爺湖温泉商店街13店舗へのヒアリング
アニメ聖地巡礼②
- 7月7日 アニメ聖地巡礼③

写真①洞爺湖町役場観光振興課ヒアリング。②火口湖。③アニメ聖地巡礼(幼稚園)。④アニメ聖地巡礼(バスターミナル)。⑤アニメ聖地巡礼(足湯)。⑥アニメフェスタポスター。⑦アニメ聖地ポイントデータ。



●総括

本研修は、教員自身の在外研修の準備もあり、7月上旬に実施した。各方面へのヒアリング調査によって、明らかになったことは次の諸点である。

第1に、「アニメ聖地巡礼」に関しては、アニメのヒットの度合いに大きく左右されるということである。洞爺湖が作品の舞台になった「天体のメソッド」は、「ガールズ&パンツァー」や「君の名は。」と比較すると、認知度が高くはない。そのため、聖地巡礼者は少なからずいるものの、洞爺湖温泉地域の人たちにアニメの存在が広く認知されているとは言えない状況であった。

第2に、洞爺湖町の取り組みとして興味深かったのは、TOYAKOマンガ・アニメフェスタ(TMAF)の展開である。2010年から6月第4週の土日で実施し、今年で8回目を終えたところである。出版社などのスポンサーはなく、町の助成金とごくわずかの運営予算で実施している。2010年は参加者3,000人だったのが、今年は60,000人と発表されている。TMAFでは、参加者の多くはコスプレに身を包むが、温泉街、ホテル内でのコスプレも認めており、リピーターも多い。実行委員会の努力や工夫、商店街の理解や協力など、利害対立を乗り越えた協力のあり方は、多くの可能性を示唆していた。

学生研修記

川岸 賢輔
地域経済学科3年
岩内高校出身



洞爺湖を訪問して

私達は、2泊3日の日程で洞爺湖町でのヒアリング調査を行いました。今回の研修では、コンテンツを活用することで生まれる経済効果の有無を北海道で調べたいと思い、アニメイベントとアニメの聖地が存在する洞爺湖町を調査しました。ヒアリング先として、観光協会と商店街で働いている方にお聞きしました。

調査結果として、イベントは低予算にも関わらず、かなりの経済効果を生み出していることがわかりました。理由として、極力スポンサーを入れないことで自由度がなくならないようにすることや、ボランティアスタッフもアニメ好きということもあり、イベントをみんなで作り上げていくという構造ができているため成功していると考えました。

今回の研修を通して、参加者とともに作り上げていく姿勢によって成功へとつながり、なにより地域への配慮を忘れないことが大切だと感じました。

齋藤 駿弥
地域経済学科3年
北海学園札幌高校出身



洞爺湖町でのアニメと観光業

私たちは今回、洞爺湖マンガ・アニメフェスタとアニメ「天体のメソッド」の聖地巡礼を通して洞爺湖町の観光業について調査しました。最初の地域研修のテーマを決めるときにあがってきたコンテンツツーリズムについて興味を持ったことがきっかけでした。

ヒアリング調査では、洞爺湖マンガ・アニメフェスタを開催する際に住民から反対意見や不満があったが、説明会などの回数を重ねるごとに住民も前向きに受け入れるようになったこと、参加者が当初3,000人から現在70,000人に増加しても開催費は当初と変わらない費用で現在も行っているなどの興味深い話を聞くことができました。聖地巡礼では実際のアニメの映像と同じ描写で写真を撮り、それをまとめ聖地巡礼マップを作成しました。大変でしたが、とても楽しく達成感のある研修でした。



1部 佐藤信ゼミ I・II

参加学生数 21 名



佐藤 信
地域経済学科
教授



よつ葉乳業十勝主管工場にて

十勝における農産物ブランド化の現状を明らかにする

研修地：帯広市・音更町

●研修目的

十勝地方は農産物を中心にした地域ブランド確立のための取り組みをすすめている。本研修では、そのためのコーディネーター役となっているフードバレーとかちを訪問し、その活動内容をヒアリングするとともに、十勝ブランドとして歴史のあるよつ葉乳業の製造工場を訪問した。

研修先・日程

10月29日 フードバレーとかち（帯広市役所）
よつ葉乳業十勝主管工場

写真①フードバレーとかちでの講義。②真剣に耳を傾けるゼミ生たち。③帯広市役所前にて。④⑤よつ葉乳業十勝主管工場内で説明を受ける。⑥よつ葉牛乳72℃15秒殺菌のパッケージ。⑦よつ葉乳業で作っている全製品。



中山 朝陽
地域経済学科 2年
滝川西高校出身



三浦 亜純
地域経済学科 3年
岩見沢東高校出身

●総括

今年の地域研修は胆振東部地震の影響で1か月以上延期となったこともあり、内容を縮小して実施した。ただし、昨年からゼミテーマとしていた“地域ブランド”について、帯広市役所内にある「フードバレーとかち」からその一端を学ぶことができた。とくに、農産物ブランド化だけではなく、次世代の人材育成、人脈構築にも力を入れ、地域産業全体の活力向上を目指していることに学生たちも強く印象に残ったようだった。他方、1次産業だけではなく2～3次産業に繋げるのが課題であることも分かった。海外輸出にも力を入れるためにも6次産業化はさらに重要な課題となると思われる。

よつ葉乳業十勝主管工場では、牛乳やバターの商品化、検品を経て梱包されるまでを見学するとともに、よつ葉乳業の創立経過についての説明を受けた。また、内地酪農の脆弱化による道内酪農製品の変化や海外からの輸入増大への影響などが今後の課題となっているとのことであった。機械化によるコスト削減とともに衛生管理にも力を入れ、「よつ葉ブランド」を維持していることが窺えた。以上、十勝における地域ブランド確立によって、人を呼び込む効果を生み、人口減少への対策ともなりうる事が考えられた。

学生研修記

研修を終えて

地震の影響もあり、予定していた1泊2日ではなく日帰りとなりましたが、事前に学習してきた質問項目、帯広市の魅力や現状について聞くことができ、非常に勉強になった研修でした。

帯広市が目指すところは、食・農においてのアジア最先端となることであり、高い能力の人材を呼び込み、リーダー人材を全国や世界へ輩出するという好循環をつくりあげようとしていることでした。また高速道路の整備により帯広市が物流の拠点にもなりつつあるとのことでした。さらに帯広市は子供に向け、フードバレーとかち出前授業も開催しており、次世代を担う子供へも説明しているなど、取り組みの積極さが伝わりました。フードバレーとかち＝十勝における地方創生、新事業の創業や、地元企業の事業拡大などの取り組みもある面も含め今後さらに帯広市が全国・世界で知られてゆくのだろう今回の研修で感じました。

十勝での地域研修を終えて

私たちは、帯広市役所とよつ葉乳業を訪れました。帯広市役所では十勝の概要やフードバレーとかち、今後の地域づくりについての話を聞くことができました。特にフードバレーとかちのコンセプトでもある農産物の加工度を高める取り組みや、今まで捨てていた枝豆の茎や葉を活用して、食品開発を行っていることにとても興味を持ちました。このような取り組みが今後の地域づくり、次世代の人材づくりをすすめて行く上で大切であることがよく分かりました。そして十勝の農産物が様々な所で活用されていることを知り、とても評価されていることを改めて実感しました。またよつ葉乳業では、工場見学をして乳製品の歴史や製造過程を知ることができました。今後海外からの輸入にどう対抗していくのか、学んでいきたいと感じました。今回の地域研修で学んだことを生かして、知識を深めていきたいです。



1部・2部 川村雅則ゼミ I・II

参加学生数 1部 17名・2部 7名



川村 雅則

経済学科
教授



札幌地域労組事務所の入る北海道自治労会館前にて

学生アルバイトをめぐる問題 労働組合、労使関係

研修地：札幌市

●研修目的

昨年度同様、今年度も、(1)学生アルバイトをめぐる問題を明らかにして『学生アルバイト白書 2018』にまとめた。(2)本来、労働契約は労使の合意の下で締結・変更されるものであり、労働条件の決定は労使が対等の立場で行うものである、ということを労働組合からの聞き取りを通じて学び、『学校で労働法・労働組合を学ぶ 2018』にまとめた。どちらのとりまとめ作業も、大学に「缶詰め」で行ったほか、2部では「合宿」も行った。

研修先・日程

前期	若者の雇用や労働法に関する学習。 学生アルバイトの聞き取り調査を実施。 3年生は、日本学生経済ゼミナール大会(以下、インゼミ大会)への参加準備を開始。 研究テーマは、「日本の労働者の働き方と労働組合」に設定。
夏期休暇	札幌地域労組の事務所を訪問して、労使関係・労働組合について学ぶ(8月31日)。伺ったお話と提供された資料を再構成して『学校で労働法・労働組合を学ぶ 2018』をまとめる。 『学生アルバイト白書 2018』のとりまとめ作業を開始。聞き取り調査の結果と、雇用契約書や就業規則などを読み込む「資料調査」の結果のとりまとめを行う。
後期	北海学園学生を対象としたアンケート調査を実施(10～11月)。 3年生は、日本大学で12月8、9日に開催されたインゼミ大会に出場。 学生アルバイトを保護する条例の制定を求めて札幌市長と札幌市議会に陳情を行い(12月18日)、学生のアルバイト問題を考えるシンポジウムを本学にて開催(12月20日)。

写真①学習会講師は札幌地域労組副委員長の鈴木一さん。②札幌地域労組が扱ってきた事例に基づきながら学習。③腹が減っては研修ができぬ(食事の風景)。④午後もひたすら学習。

●総括

(1) 毎年作成している『学生アルバイト白書』は、聞き取り調査、アンケート調査(有効回答493人)に加えて、雇用契約書や就業規則の読み込み(「資料調査」、学生アルバイト短歌(人文学部の田中綾教授の提供))で構成されている。

(2) 経済的な事情が背景にもあって、学生の多くがアルバイトをしており、なおかつ、授業時間数を超えるほどに長時間働いているのであるが、契約(労働契約)を結ぶという感覚が乏しかったり、基本的な労働条件・制度について知らずに働き始めているところが気になりである。

例えば、一つには、賃金や労働時間などの労働条件を定めた書面の明示・交付が労働基準法及び施行規則で定められている。しかし、書面で示され、かつ、書面が交付もされているのは全体で6割に満たない(図1)。またもう一つには、学生であっても当然、取得が可能な有給休暇については、そもそも知らされていないものが、(有休付与が開始される)6か月以上勤務者に限定しても、6割を占める(図2)。取得の条件などはおそらくは就業規則に書かれているのだと思われるが、雇用契約書の存在までは知っていても、就業規則の存在は知らないか、知っていてもみたことはないという学生がほとんどだと思う(念のため言えば、周知義務が使用者にはある)。

(3) 資料調査では、雇用契約書は、単に「見る」だけではなく、どういう箇所がポイントであるのか、

学生研修記

竹内 七海

経済学科 2年
小樽潮陵高校出身



私たちがやるべきこと

私たちのゼミでは、学生に身近なアルバイトの問題や過労死・長時間労働などの様々な労働問題について学んでいます。夏季休業中には、労働問題を解決するためにとても重要な役割だとされている労働組合について深く知るため、札幌地域労組に行き、副委員長を務める鈴木一さんからお話を聞いてきました。地域労組と企業別労働組合との違いや、地域労組の日々の取り組みという基本的なところから、具体的な問題解決事例、学生へのアドバイスなど、鈴木さんには、沢山のことを教わりました。私はその中でも、「日本の労働者は無知である」という鈴木さんの言葉が印象に残りました。労働問題を専門としている私たちが今やるべきことは、様々な情報や学んだ知識を発信し、就職後に自分自身や仲間を守ることができる人を増やすということではないかと思いました。

山田 彩

経済学科 2年
北海学園札幌高校出身



知識を身につける重要性

私たちは、学生アルバイトの実態や、日本の労働者が直面している様々な労働問題について学んでいます。夏季休業期間中には札幌地域労組の事務所を訪問し、副委員長の鈴木一さんにお話を伺いました。

札幌地域労組では、労働組合をつくる相談や労働者の駆け込み相談の対応などを行っていて、労働者を守るための手助けをしてくれています。鈴木さんには、労働者は自分の労働状況や権利について無知であることが多く、不当な扱いでも受け入れてしまうことがあるけれども、どんな些細なことでも労働組合に相談してみれば解決できることがたくさんあるということを知りました。

知識がなければ、実際に働いてトラブルに遭ったときにどう対処すればいいかわからないので、ワークルールの知識を学生のうちから身につけておく必要があると思いました。



図1 働き始めるとは労働契約を結ぶことでもあるが、契約内容の書面での明示・交付は徹底されていない労働条件や待遇の提示方法

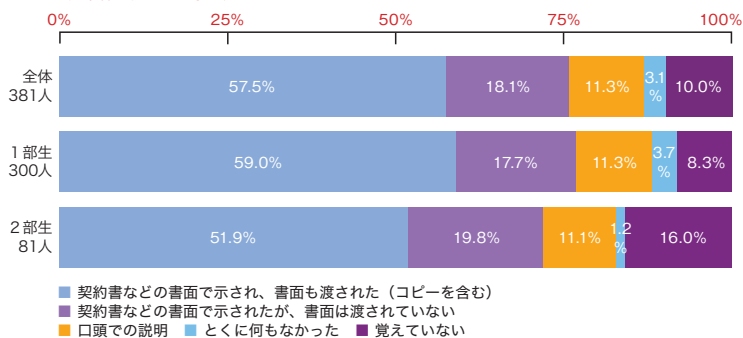
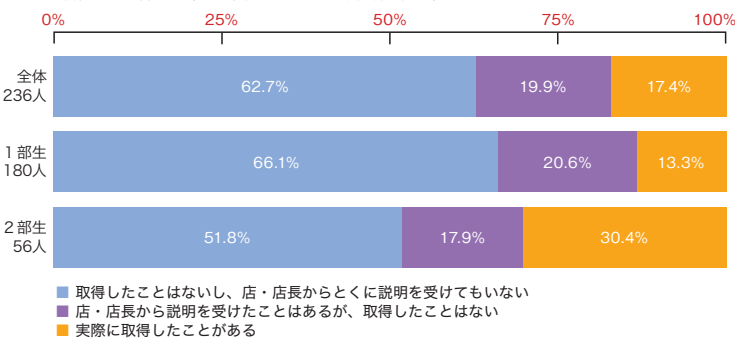


図1 6か月以上勤務者に限定しても、有給休暇の説明を受けたことも取得したこともない学生が6割有給休暇の取得状況（注：対象は6か月以上勤務者に限定）



どういう点に留意すべきなのかを「読み込む」必要があることを感じる。例えば、「業務の都合上、所定勤務時間を超えて勤務していただく場合があります」という規定が設けられていたり、変形労働時間制が採用されている事例や、「業務量の減少、業務内容の変化」など契約解除・不更新の基準が幅広く採用されている事例、あるいは、「評価により昇給有り」など抽象的な昇給基準などは、「見る」だけでは何が問題なのか、学生には分からないと思うからだ（以上の詳細は、『学生アルバイト白書2018』を参照されたい）。

→ <http://www.econ.hokkai-s-u.ac.jp/~masanori/index> からダウンロード可

(4) 問題の解決策を模索するため、今年も札幌地域労組を訪問し、労使関係・労働組合の重要性について、具体的な相談事例や取り組みにもとづきながら学んだ。そのなかから今回は、パワハラ撃退事例を『学校で労働法・労働組合を学ぶ2018』にまとめた。職場に組合がなくても、地域の労働組合に駆け込んで問題を解決することが可能なのだと彼らは理解したと思う。

日本では、多くの労働組合が、職場の労働時間を規制できずにより、労働組合のある企業でも過労死が発生している。それに対して、働き方のチェックを行い、改善を図っている労使も存在する。3年生は、そうした事例を札幌地域労組に学び、インゼミの論文にまとめた。



▼『学生アルバイト白書2018』

▲『学校で労働法・労働組合を学ぶ2018』

学生研修記

小林 直喜

経済学科3年
札幌啓成高校出身



久保 大輝

経済学科3年
札幌藻岩高校出身



地域労組を訪れて

ゼミナールⅡでは地域の労働組合である「札幌地域労組」を訪れ、副委員長である鈴木さんにお話をお伺いしました。お話の内容としては、労働組合の役割や地域労組が行っている活動、実際の相談・解決事例などを説明していただきました。

労働組合は、使用者に労働基準法を守らせ、そして、今度はそれを上回る交渉を行います。具体的には、未払い残業代の支払いや、サービス残業をさせない取り組みだけではなく、働きやすい職場の実現を目指して労使交渉をしています。もっとも、鈴木さんから聞くところによれば、組合側の要求が実現するまで何年かかる事例は少なくありません。「労働組合に入ればすぐに状況が改善される」というのは間違いであり、コツコツと地道に組合が使用者側に対して働きかけた努力の結果が今なのだと感じました。そしてなにより僕が一番印象に残ったのは、「自分たちが気持ちよく働ける環境になって初めて伸び伸びと仕事ができるはずだ」という鈴木さんの言葉です。労働者それぞれが使用者に対してしっかりとした意志を持って自己主張することが働きやすい職場を実現する上でも大切だと感じました。

「必要とされる」労働組合

労働組合では、どのような活動をしているのか知らない人は多いのではないのでしょうか。僕も元々、詳しいことはよく知りませんでした。

12月のインゼミ大会の参加に向け、昨今問題となっている過労死や長時間労働が発生する原因は、法制度の不備はもちろんのこと、労働組合の規制力の弱さにあるという問題意識のもとで、前期から、労働組合について学習を進めてきました。そして学習したことを踏まえ、札幌地域労組を訪問し、労働問題の解決に取り組んでいるお話を聞いてきました。

地域労組加盟のある労働組合では、労働環境をより良いものにするために、様々な提案が出されています。もっともその会社も、以前は労働組合が存在せず、組合を結成してから、何度もの団体交渉を経て労働組合が根付き、今日の取り組みがあるのだと聞きました。労働問題を解決するには、労働者のためにしっかりと動いてくれる労働組合の存在が必要であると実感しました。



写真⑤ハイ・テンションで作業中。⑥集中して作業するため2部ゼミでは合宿も開催（出陣式）。⑦3年生は鈴木さんに追加で聞き取り調査。⑧地域研修報告会では学びの成果を全て出し尽くす。

1 部

徐涛ゼミ I・II

参加学生数 10 名



徐 涛

地域経済学科
教授



旭山動物園ヒョウのモニュメントにて

外国人観光客誘致の実態調査@旭山動物園

研修地：旭川市

●研修目的

旭山動物園の外国人観光客（インバウンド）誘致と満足度調査：2018 年 VS 2016 年

研修先・日程

- 10月3日 旭山動物園にて、広報担当の村重友康さんより外国人観光客誘致の事業紹介・質疑応答。
旭山動物園にて、外国人観光客のアンケート調査を実施。
- 10月4日 旭山動物園にて、外国人観光客のアンケート調査を実施。
外国人の目線から園内の施設を調査。

写真①AReader。②動物紹介文。③もぐもぐタイム掲示板。④銀聯標識（左上）。⑤中国人観光客と記念撮影。⑥⑦⑧調査風景。



●総 括

一昨年の2016年は、旭山動物園にて外国人来園客を相手にアンケート調査を実施した。そして今年は再度調査を実施した。

旭山動物園の入園者数は、2007年度の307万人をピークに減少しつづけ、昨年度はピーク時の半分未満の143万人に低下した。ところで、同期間中に、外国人の来道者数（実人数）は71万人から279万人に約4倍に拡大した。そのため、数年前から旭山動物園がその誘致に力を入れ始めた。

2016年の調査は、強風に合い、観光客が激減した中で、59のサンプルをとった。調査結果をみると、旭山動物園についての外国人来園者の満足度は、非常に高かった。同時に、巨額の資金が投入されたホームページとAReaderの認知度が極めて低かった。

また、動物紹介、もぐもぐタイム掲示板とホームページの動物図録の多国言語化、もぐもぐタイムの同時通訳機についての要望が強かった。そのなかに特に安価ですぐに着手できるものにつて、我々が直接旭山動物園に提案した。たとえば、もぐもぐタイム掲示板について、日本語の動物名前の隣に、動物写真の貼り付け、あるいは、英語、中国語併記のネームプレートの使用などの対策を、具体的にアドバイスした。

今年の調査も、不幸なことに、1日目に大雨が降った。大変な環境の中で、学生たちが熱心に調査に参加した。その結果、前回を上回る124のサンプルを取ることに成功した。

調査結果をみると、旭山動物園に対する満足度は、非常に高い水準を維持している。しかし、残念なことに、ホームページとAReaderの認知度が、相変わらず極めて低い。また、もぐもぐタイム掲示板についても、全く改善がみられない。

その理由について、旭山動物園はこう主張した。「人員・資金的部分についてもギリギリのところで行っておりまして、ひとつひとつの事項については、手間もコストもかからないと思われるものにつきましても、全体で見ると大きな負担となっている」。「我々はインバウンドに限らず、多方面で未だ多くの課題を抱えており、また毎年多くの新たな課題が発生し、優先順位を考えながら、限られた資源を投入している」という。

手間もコストもかからないインバウンド対策でも大きな負担になっている？それでも優先順位が低い？旭山動物園はインバウンド疲れに陥ったとも言うべきなのか。

そう言えば、昨年の地域研修は、旭山動物園と旭川市買物公園通りにて、インバウンド政策に対する日本人の評価を調査した。インバウンド増加の中で「地域が恩恵を得ていない」と感じる人は4割を超えた。そして、その方々のほうが、インバウンドの増加は全体的に「デメリット」の方が大きいと感じる傾向が高い（図）。

このように、如何に地域にインバウンドの「恩恵」を還元するかは、喫緊の課題である。我々も旭山動物園のインバウンド誘致に活かせたらと思い、3年間調査を続けてきた。

ところが、調べた結果、旭山動物園は、ほんとうは、「年間150万人くらい」は「すごくいいバランスになった」（坂東園長、http://yorimichi.airdo.jp/asahiyama_kakijiro）と考えている。なるほど、もしかして旭山動物園にとってそれほどインバウンドを増やす必要がないかもしれない。

我々は「対牛弾琴」をやってきた、と今になってやっと気付いた。

〈ご協力くださった外国の方々と旭川市の方々に感謝を申し上げます〉

※学生の報告資料はブログに載せる予定である。

アンケート調査メンバーの声

●地域経済学科2年

森田 謙成 [札幌東陵高校出身]

みんなは中国語の授業を受けていて、私は授業を受けたことがなかったのでも不安だったのですが、先生や先輩がおっしゃっていた通り、そんな不安はすぐなくなりました。

●地域経済学科2年

金井 和晃 [静内高校出身]

普段外国人の方と会話するということは滅多にないので、アンケートに答えてくださるとき自分の中国語が伝わることを実感し、貴重な体験をすることができました。

●地域経済学科3年 A班チームリーダー
阿部 拳也 [石狩南高校出身]

昨年とは異なり、中華系の人を対象とした調査で初の試みとなりましたが、まずはみんなであいさつとアンケートに答えてくれた感謝の言葉をいうことから始め、緊張を解きました。事前準備期間は多少の不安もありましたが、時間が進むにつれ、不安がなくなり、下級生も自分で何をすべきか理解できていたので、この経験は来年の研修にも必ず活かせると思いました。

●地域経済学科2年

澤登 稔 [札幌創成高校出身]

片言であろう私達の中国語に対して、足を止め、看板を見て快く笑顔で対応してくれる方が想像以上に多い。アンケート一問一問に対して、時間をかけてゆっくり読み丁寧に答え、自由記入欄すら記入される方が多く見られました。アンケート調査に対しての真剣さや私達に対しての親切さが日本人より優れていると感じました。

●地域経済学科2年

齊藤 祐希 [石狩南高校出身]

アンケート調査に協力してくれた中華系観光客の中には私たちゼミ生と一緒に写真を撮ろうとする人など、非常に私たちに友好的な接し方をしてくれる観光客が多くいることを知ることができ、その結果、外国人観光客に対する印象が良い印象へと変わりました。

●地域経済学科2年

佐々木 歩夢 [市立函館高校出身]

自分の中国語が通じるのかと不安だったものの、中国圏の方と中国語でコミュニケーションがとれたことは嬉しく、良い経験となりました。

●地域経済学科2年

田畑 尚輝 [北海高校出身]

外国人とのコミュニケーションをとる機会や調査をする機会はなかなかできるものではないと考えるため、貴重な時間であり、貴重な経験することができました。

●地域経済学科2年

菅澤 玲 [石狩南高校出身]

カタコトな中国語でも協力してくれた時はとても嬉しかったです。外国人に対する意識が研修を通して変わりました。とても充実し、今までにない経験することができました。今回の調査が少しでも旭山動物園に役立つものになればと思っています。

●地域経済学科2年

滝谷 優太 [岩見沢西高校出身]

各自が練習してきた中国語の文を用いて中華系の方に話しかけ、相手の方にしっかりと自分たちの中国語が通じたことはとても嬉しく感じました。先生と班長の方が組んでくださった計画通りに動くことができたので、よかったと思います。

学生研修記

仲間との協力、意思が生んだ成果



葛西 英一

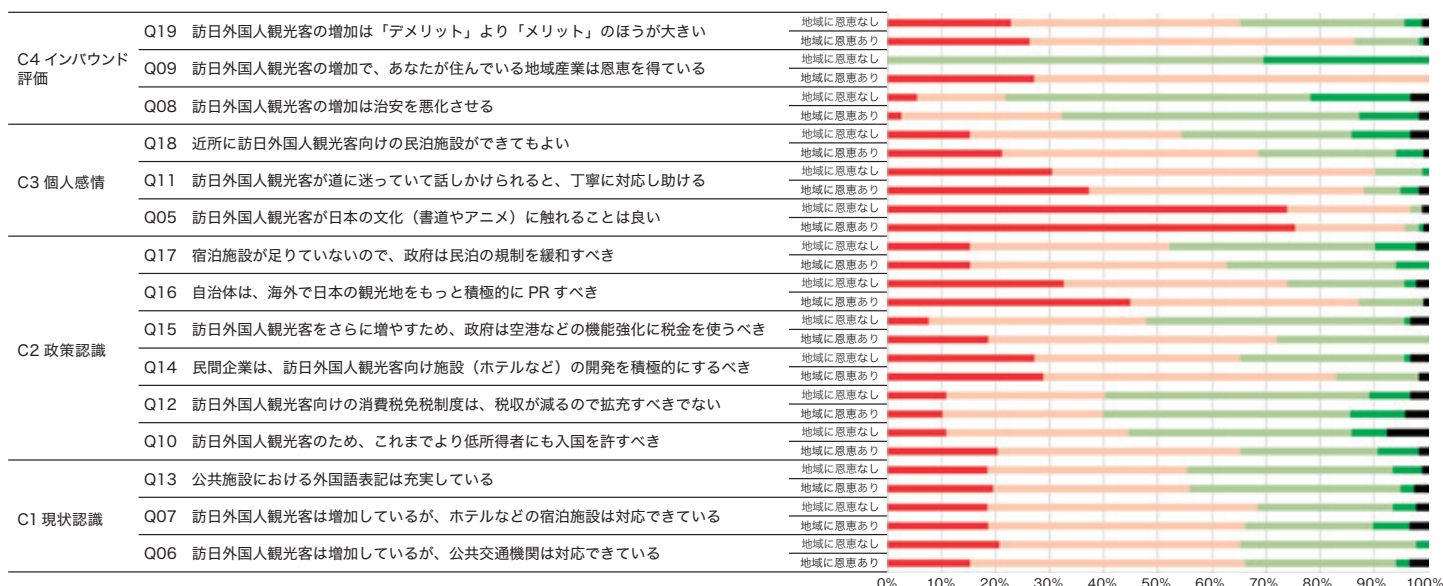
地域経済学科3年
札幌国際情報高校出身

徐ゼミは2日間に渡って旭山動物園でアンケート調査を実施しました。今回の調査は一昨年の継続調査という形で、中華系来園者を対象に行いました。アンケート作成の段階では、一昨年の結果から改善できる項目を徐先生やゼミ生と話し合い、新たに「日本人」の印象と「日本政府」の印象を質問する項目などを追加しました。「人」と「政府」を区別することで、アンケート結果をより細かく分析できると考えたからです。当日、2つの班に分かれてアンケート調査を開始しました。私はB班のチームリーダーを務めましたが、ゼミ生みんなが外国人相手に中国語で話しかけるのは初めての体験でした。1日目は天候も大雨で、最初は中々サンプルが取れないだろうと思ってしまいうこともありましたが、話しかけてみなければ何も始まらない、まずはチームのみんなと「你好」と元気よく挨拶することから始めました。また、外国人がたくさん集まりそうな休憩所やフードコートなどを何度も訪れ話しかけることで、難航すると思われた調査は一日目から順調に進めることができました。緊張すると思われた中国語での質問は、ローテーションで全員がチャレンジできるようにした結果、最初こそ言葉が飛んでしまうこともありましたが、サンプルが取れるにつれてチームみんなの自信に繋がり、2日目には誰もが緊張せず話しかけることができるようになりました。チームワーク以上に、全員がサンプルを取ろうという強い意思があったおかげで、自分自身もリーダーとして2日日間チームをまとめることができました。最終的には2班合わせて124のサンプルを取ることができました。

今年の調査では悪天候にも関わらず一昨年の2倍以上のサンプルを取ることができ、この成果と達成感是非常に大きいものとなりました。また、2日間という短い期間でサンプル数以上の中華系の人々と片言の外国語ではあるが話すことができ、おそらくはもう味わえない、貴重な経験することができました。

図 インバウンド意識(「地域に恩恵」区分)

■ とてもそう思う ■ そう思う ■ あまりそう思わない ■ まったく思わない ■ 無効



1部 中園桐代ゼミⅠ

参加学生数2名



中園 桐代
地域経済学科
教授



地域研修報告会にて

母子世帯の現状と子どもの進路の課題

研修地：札幌市

●研修目的

ひとり親世帯の子どもの貧困率は54.6%と大人が2人以上いる世帯の貧困率12.4%を大きく上回る（2012年、厚労省）。この問題は「子どもの貧困」として認識され、全国では子ども食堂や学習支援といった支援が展開されている。今回の地域研修では、子どもの貧困の背景にあるシングルマザーの貧困や当事者団体の活動を知り、子どもの進学の課題や必要な対応策を当事者団体の方々と一緒に考えることを目標とした。

研修先・日程

- 8月5日 しんぐるまざあず・ふぉーらむ北海道主催の講演会参加
- 10月7日 札幌市母子寡婦福祉連合会・奨学金勉強会で報告
- 11月2日 札幌市母子寡婦福祉連合会理事長講演



●総括

日本のシングルマザーの特徴は「働いても貧困」であるということだ。就業率は8割を超えているのにも関わらず、平均就労収入は200万円（2016年 厚労省調査）しかない。まず、この実態を日本の労働市場、労働慣行との関連で原因を理解するため「しんぐるまざあず・ふぉーらむ北海道」の講演会に参加した。学生はシングルマザーのみならず女性全般の貧困の原因と現状を理解できたと思う。講演の2つ目として、シングルマザーの当事者団体である札幌市母子寡婦福祉連合会の理事長にその活動について講演して頂いた。長年にわたり当事者団体として就労支援や生活支援等行政と協力しながら、幅広い活動を行っていることを学生は理解できたと思う。

そして、学生自身が大学生活に必要な経費（学費だけでなく、部活や就職活動等も含め）を調査し、また学生支援機構の奨学金制度を学び、札幌連の「奨学金勉強会」で報告を行った。終了後のアンケートや茶話会で、卒業後の就職や奨学金の返済について不安を感じているシングルマザーが



東区民センターで行われた札幌連の奨学金勉強会で報告

存在している事がわかった。また、高校からの奨学金の制度の説明、あるいは日本学生支援機構の情報提供も十分でないことも明らかになった。奨学金制度の不十分さはもちろんであるが、利用する子どもと親に対する情報提供がまずもって行われるべきであると思う。

学生研修記

西村 健太
地域経済学科2年
札幌清田高校出身



藤田 素生
地域経済学科2年
札幌東商業高校出身



母子家庭の子どもの進学問題と奨学金

私たちは地域研修として札幌市の東区民センターで行われた奨学金勉強会で奨学金制度や大学でかかる費用について札幌連の方々の前で話した。そのために私は学生支援機構の奨学金制度について勉強したが、勉強会では制度はあるものの返済義務などの条件から使いたくても足踏みしてしまう家庭もあるということがわかった。また、実際に進学でかかる費用も調査したところ通常でも高額なうえ、サークルや教材費でさらに高くなっていた。進学が断念されないように奨学金は設けられているが、その告知やサポートが不十分なものだった。課題が大きく、私たちができることは少ないが制度について考えることや声を上げることが必要だと思った。これからこの問題は注視していく必要がある。

札幌連の奨学金勉強会の研修を終えて

私たち中園ゼミは、札幌市東区民センターで奨学金勉強会に参加し「母子家庭の子供の進学問題」をテーマに地域研修を行いました。参加した奨学金勉強会では、高校生のお子さんを持つお母さん方がどのような不安を持っているのかという話を聞くだけではなく、私たち自身が奨学金制度や進学に必要な費用について事前に調査し、お母さん方前で発表しました。発表後には在学している学校で奨学金の説明を受けたか、奨学金を利用する予定はあるかといったアンケートを実施し、その結果から奨学金を借りたいと思っていても、学校での説明がプリント配布のみなどサポートが乏しいということがわかりました。

地域研修を通して、母子家庭の子供の進学問題の解決には学校でのサポートや説明会の強化や、札幌連のようなコミュニティの参加が必要だと感じました。

写真①(公社)札幌市母子寡婦福祉連合会が置かれる札幌市社会福祉総合センターの外観。②③地域研修報告会で発表。④地域研修報告会でコメントする札幌市母子寡婦福祉連合会の理事長・箭原恭子さん。

1部 西村宣彦ゼミ I・II

参加学生数 28 名



西村 宣彦

地域経済学科
教授



冬にはジュエリーアイスが打ち上げる大津海岸にて

学生との協働によるトヨコロ創生プロジェクト

研修地：豊頃町

●研修目的

十勝の農村・豊頃町の「地方創生」（移住・定住促進、所得・雇用増につながる商品開発、地域資源・魅力の発見・磨き上げ、交流人口増・・・）のために具体的に何ができるのかを、豊頃の皆さんの仕事と暮らしの現場で受け入れてもらいながら、ともに考え、企画・提案・実践することを目的とした。

研修先・日程

- 8月27日 ①宮口町長の歓迎あいさつ
②歴史の森ガイド見学、③農協・大根果農場見学、④大津漁協視察、漁港見学、⑤株式会社ELEZO社視察、⑥ナイトセミナー（豊頃町役場企画課、産業課、商工観光課）
- 8月28日 ①トヨコロ暮らしと仕事の魅力探し＆発信プロジェクト（森農場、植村農場、川口農場、田頭牧場、相澤牧場）、②トヨコロ観光魅力アッププロジェクト（サイクルツーリズム体験、お土産スイーツ開発@豊月）、③モイワ商店街再生リサーチプロジェクト（15軒聞き取り調査）、④町民の皆さんとの交流BBQ
- 8月29日 ①アウトドア・アクティビティ（長節沼でのシジミ取り）、②インドア・アクティビティ（地元食材での調理実習）、③地域おこし協力隊・鎌本真理さんとの意見交流会、④研修成果発表会の準備作業
- 8月30日 ①研修成果発表会の最終準備作業、②研修成果発表会、③帯広市内で昼食休憩

写真①高級食肉加工のエレゾ社を視察＆試食。②サイクルツーリズム班、豊頃のシンボル・ハルニレの木へ。③森農場で農作業体験。④「豊月」さんの受け入れでお菓子作り体験＆お土産スイーツ開発に取り組む。⑤商店街聞き取り調査。⑥最終日の研修成果報告会。



●総括

①「豊頃暮らしと仕事の魅力探し＆発信プロジェクト」では5軒の農家（畑作・酪農）の受け入れで農作業を体験しながら農家の方々と交流を深めた。きつい中でも自分達のペースで和気藹々と働く仕事ぶり、命と向き合う仕事であること、人の温かさが学生達の印象に残り、地域インターンシップ等を通じて農家の方々と直接触れ合う機会を設けることが重要と考えた。②「豊頃観光魅力アッププロジェクト」では、1班は地元サイクリストのガイドでサイクルツーリズムを体験し、十勝平原の広大さを体感しながら、学生目線で魅力と課題を探った。もう1班は豊頃土産が少ないという課題に対して、地元洋菓子店の協力でお土産スイーツの開発に取り組み、ジュエリーアイスをモチーフにしたお菓子や、地元名産の「白小豆」を使ったスイーツを提案した。③「茂岩商店街リサーチプロジェクト」では、豊頃町の中心市街地の現状と課題を明らかにするため、聞き取り調査を行った。高齢化が進み、個店としても商店街としても新たな取り組みを行う意欲が失われがちなかでも、外から新規開業した方は考え方も前向きであることがわかった。班別プロジェクト以外でも、大津地区にラボを構え、「『田舎の田舎』への移住・定住」を実践する高級シルキュトリ製造のエレゾ社の皆さんの志の高さや、毎朝交代で美味しい食事を作ってくれたお母さま方の愛情深さに感銘を受けた。訪問するまで多くの学生が存在すら知らなかった小さな町の底力はハンパなく、大きな可能性を感じた。お世話になったすべての皆さまに心から感謝申し上げる。

学生研修記

谷内 楓子

地域経済学科 2年
北広島高校出身



安部 雄貴

地域経済学科 3年
釧路北陽高校出身



地域の魅力を活かす、豊頃町だけのまちづくり

私達を明るく迎え入れて下さった地元の方々との出会い、地元食材の美味しい料理など、豊頃町はアットホームで温かい町だった。農業・酪農体験、お土産開発、サイクルツーリズム、商店街調査といったグループ研修や交流BBQなどを通じて、実際に町の方と触れ合い、話を聴くことで、豊頃町をより深く知ることができた。人口減少という問題に直面している豊頃町。その中で「どんな豊頃町にしたいか」という目標が明確ではなく、行政と町の方々の情報共有の必要性などが課題に挙がった。だが、地域商社の設立や「互産互消」の取り組み、地域おこし協力隊の鎌本真理さんのような強い志を持ってまちづくりに取り組む方々の姿もあった。ジュエリーアイスやハルニレの木といった観光資源だけではなく、広大な土地や豊かな農産物など、豊頃町の魅力と可能性を現地に行くことで強く感じる事ができた。

豊頃町における移住・定住の可能性

私は森農場で1日、作物の収穫体験や出荷前作業の手伝いをさせていただいた。土のついた大量の野菜を一人で綺麗にし、売り物になるよう成形し、大変な作業だった。そしてカボチャであればあそここの農家さんのものが美味しいと互いの作物を認め合うなど、質にこだわった生産を行っているのを感じた。また行政ヒアリングでは様々な施策を行いすぎて手をつけられていないのが課題と知った。また冬に数日間町に滞在する地域インターンシップのイベントを実施していることを知った。広大な農地を生かしたアクティビティを楽しむもので、様々な人に豊頃を知ってもらえる機会になる。このような滞在型観光を通じて、豊頃の人々の温かさを知ってもらい、移住者呼び込み、外からの刺激を受けることが、地域活性化の一步になると感じた。豊頃の可能性を大いに感じた4日間となった。

1部 濱田武士ゼミ I・II

参加学生数26名



濱田 武士
地域経済学科
教授



ナイタイ高原牧場展望台にて

ふるさと納税と移住・定住対策 研修地：上士幌町

●研修目的

昨年、上士幌町は、ふるさと納税を財源に移住・定住に繋がる対策を充実化させ、移住者が増加していることで注目されるようになった。私たちは、その実践について学び、なぜそれらの対策が移住者の増加を導いたのかを、考察することにした。

研修先・日程

- 8月24日 上士幌町役場
町長講話「町の政策等について」
学習センターわかっか
座学「移住・定住政策について」
移住者へのグループインタビュー
座学「ふるさと納税の活用について」
- 8月26日 施設見学
交通ターミナル、ナイタイ高原牧場、
道の駅建設予定地

写真①上士幌町長の話を聞く。②ひがし大雪博物館内見学。③上士幌町からの説明。④移住者へのインタビュー。⑤体験移住の住宅見学。⑥役場職員の話聞く。⑦NPO施設内での研修。



杉本 優
地域経済学科 2年
石狩翔陽高校出身



佐藤 匠
地域経済学科 3年
長沼高校出身

●総括

上士幌町は、他地域と同じく過疎化が進んでいたが、特産品をインターネット販売する取り組みや、大規模農業法人の設立による雇用拡大で就農者の流入があって住宅支援をしていた。そうした中で、ふるさと納税が始まり、円滑に特産品を返礼品にでき、税収が増加した。ふるさと納税を財源にした定住政策は多岐にわたるが、特筆すべきは子育て世代に手厚い点である。例えば、「認定こども園」を設立し保育・養育費を無料にし、高校卒業までの医療費も無料にしている。他方で、移住者増の背景には、移住者のためのワンストップ窓口を担うNPO法人コンシェルジュの活躍もある。ふるさと納税の配送業務を下請けし、町が建設した生活体験住宅への移住希望者の世話や、移住者同士の交流会も企画し、移住者の相談窓口を行っている。さらに町は、寄付額が多い都市圏において納税者と交流を図るフェアを毎年実施して、関係人口ともいえる「応援人口」の増加を図っている。

ふるさと納税を使った移住・定住対策は、希望者の移住動機を高めるものであり、移住者へのきめ細かな配慮、納税者との交流拡大が移住希望者増を後押ししているのではないかと、私たちは考えた。

学生研修記

ふるさと納税で「応援したい」人を増やす

現在、ふるさと納税は岐路に立っていると言っていると思います。返礼品競争が激化してしまい、納税者側も「節税できる買い物」という考えをもつ人も増えてきました。今回訪れた上士幌町では、ふるさと納税を大変有効活用していると言えます。こども園の無料化や住宅助成を行っていますが、それ以上に納税者とのつながりを深めるという点が強く印象に残りました。一回限りの関係で終わるかもしれませんが、それでも「上士幌フェア」の開催など、自治体と納税者の関係性を深めていくことが本当の意味で「応援したい」というリピーターを増やすことができると感じました。講義をしてくださったNPO法人の方がおっしゃっていましたが、「応援してもらうことが目的」という考え方が今後のふるさと納税にとって重要になってくる。そう深く今回の研修で考えました。

ふるさと納税を財源とした移住・定住政策

私たちはふるさと納税を財源とした移住・定住政策と応援人口の関係について調査するため、私たち自ら上士幌町を研修先として決定し、訪問させていただきましたこととなりました。研修先では竹中貢町長自ら上士幌の現状や政策についての説明があり、またふるさと納税や移住・定住政策に大きく貢献しているNPOコンシェルジュが行う業務内容や、移住政策の一環である体験用住宅の見学などを行いました。これらの研修を通してわかったのは、移住・定住のための政策が多いことはもちろんなのですが、それらの政策が応援人口つまり上士幌と繋がりのある人を増やすことに結びついているということです。単純な考え方ではありますが、上士幌に繋がりのある人を増やせば増やすほど、移住したいと思う人の割合は僅かながらでも増えるはずで。そのような点が上士幌と他の自治体との相違点ではないかと考えました。



2部

濱田武士ゼミ I・II

参加学生 13名



濱田 武士

地域経済学科
教授

うたしない チロルの湯にて

産炭地域における小規模自治体が直面している人口対策の課題

研修地：歌志内市

●研修目的

歌志内市は、かつて炭鉱産業が栄え、ピーク時は人口が4万人を越えていたが、閉山と共に人口が減り、現在は4千人を下回っている。この危機にどう対応しているのか、私たちは、歌志内市に訪問して、自治体が直面している人口対策の課題を考えることにした。

研修先・日程

8月22日	歌志内市役所 郷土館ゆめつむぎ
8月23日	歌志内認定こども園 歌志内上歌ヴィンヤード 中・北空知廃棄物処理広域連合（エネクリーン）
8月24日	水耕栽培（ティ・エスフードシステム歌志内ファーム）

写真①郷土館ゆめつむぎ内の研修。②歌志内認定こども園の研修。③上歌ヴィンヤードの研修。④地域協力隊員の話を聞く。⑤市役所の職員と対談。⑥水耕栽培施設の見学。⑦水耕施設栽培前で集合写真。



●総括

歌志内市では、地方創生が始まり、子育て世代をターゲットにした移住・定住政策に力が注がれるようになった。なかでも、2018年8月に幼保連携型認定保育園として開園した「認定こども園」は対策の目玉になっている。対象となる子供および保護者が歌志内市の区域内に居住して利用する場合は保育料が無料となるからである。そのほか、医療費が18歳まで無料となり、小中学校の修学旅行費用は全額助成、給食費や教材費の一部は市が負担することとしている。移住者には住宅支援もある。他方、歌志内市は、仕事づくりや新産業の創出のために、ワイン用ぶどう栽培事業や水耕栽培事業などを支援しているが、まだ道半ばであり、Iターン、Uターン、Jターン者の増加につながる雇用機会を創出するには至っていなかった。

子育て、教育環境が充実化し、暮らし面の支援策は進んでいるが、残念ながら仕事面については産業創出支援が行われているが展望が開けていない。もともと鉱山で栄えたまちであり、平野部が少ないがゆえに、新たな産業立地・産業創出はそもそも難しい。それだけに移住者を呼び込むには、雇用機会創出面でも周辺の自治体と広域連携を図り、自分たちのまちの魅力について明らかにし、住民のアイデンティティを確立することが重要だと、私たちは考えた。

学生研修記

寺嶋 省吾

地域経済学科 2年
札幌北斗高校出身

本間 隆斗

地域経済学科 3年
滝川西高校出身

歌志内に訪問して

今回の地域研修で歌志内に訪問させていただいて、地域を通して少子高齢化に対する自治体のアプローチや今後の政策を現地に足を運び、知ることが出来たのは非常に貴重な経験となった。歌志内は日本一人口の少ない市であり、人口減少により消滅の危機にある市と言われている。その市がどのような未来を見据えて政策を行っているか、事前調査の段階で興味を持った。歌志内には二泊三日で調査に行き、市役所や認定保育園、郷土資料館、エネファーム、ブドウ畑やハウス栽培を見学した。様々なものを見て思ったことは、人と人とのつながりを重要視して、問題に全員で取り組むことの大切さを肌で感じた。札幌という都会では感じられない、炭鉱のまちならではの長屋文化が根付いており、人の距離が近い。この距離が問題解決への熱量に変わり人に伝導することで、本当に変わると確信した。

歌志内地域研修を通じて学んだこと

今回の地域研修は歌志内市でした。地元から近いのですが、知らないことばかりでした。歌志内市が人口減少対策としておこなっている子育て支援、そして新たな産業を産み出すための施設、広域連携施設について3日間研修をおこないました。子育て支援としてこども園を見学しました。お話では、市内に住む人であれば保育料無料など支援に関して力を入れていることがよくわかりました。産業創出として水耕栽培、ワイン畑も見学しました。どちらも試験段階で今すぐの雇用の創出が期待できるものではないことがわかりました。最後の広域連携施設として中・北空知エネクリーンを見学しました。ごみ処理施設でありながら発電所であることに驚きました。

この研修を通じて、人口減少に対する対策の難しさを現地で知ることができました。

1部 早尻正宏ゼミ I・II

参加学生数 18 名



早尻 正宏

地域経済学科
准教授



よりあい処「華」にて

原子力災害に向き合う山村の過去、現在、未来

研修地：福島県田村市都路地区（旧・都路村）

●研修目的

2011 年 3 月に起きた東京電力福島第一原子力発電所事故が地域経済に与えた影響を探り、復興の道筋を議論することを目的に、福島第一原発から半径二十キロ圏内で初めて、避難指示が解除された福島県田村市都路地区で現地調査を実施した。

研修先・日程

- 8月22日 田村市都路行政局で聞き取り。田村市都路行政局産業振興課（宗像邦司課長）：原発事故から現在に至る都路地区の動向（林業情勢、復興施策）、コミュニティ復興に果たす市職員の役割。
- 8月23日 ふくしま中央森林組合都路事業所で聞き取り。ふくしま中央森林組合（永沼幸人組合長）：原発事故への対応状況と将来展望。福島県庁（木村憲一郎氏）：福島県内の森林・林業の特徴と復興施策。シイタケほだ場の跡地で聞き取り。シイタケ専業農家（坪井哲蔵氏）：原発事故がシイタケ栽培に与えた影響。よりあい処「華」でワークショップ。田村市復興応援隊（NPO 法人くらスタ 佐原禅理事長）によるレクチャー。4グループに分かれ地元住民に取材し、その結果に基づき都路地区のPR動画（3分）を公開収録。
- 8月24日 みやこじスイーツゆいで聞き取り。都路商工会（佐久間剛経営指導員）：地元農産品を使った6次産業化の取り組み。

写真①帰還困難区域の大熊町を抜けて調査地へ、奥は東京電力福島第一原子力発電所。②帰還住民の生活必需品を揃える商業施設「Domo（ど〜も）」。③原発事故により閉鎖したシイタケほだ場の聞き取り。④地区住民に取材。⑤都路町商工会によるレクチャー。⑥宿泊した川内村内の「いわなの郷」のモニタリングポスト（大気中の放射線量の測定装置）。



●総括

私たちのゼミでは今年度、原発事故という未曾有の災害に向き合ってきた福島県に焦点を当てて、専門書の輪読、資料の収集とその分析を進めてきた。研修先として田村市都路地区を選んだのは、原発事故で出された避難指示が2014年4月、他地域に先駆け解除された「先発地域」たる同地区が、復興に向けてどのような課題に直面しているのかを明らかにしたかったからである。

ゼミ生は、事前学習の成果を活かし、市役所や森林組合、県庁、商工関係者と積極的に情報交換を行った。四輪車のみ通行を許される帰還困難区域を車窓から眺めたり、除染土壌の詰まったフレコンバッグが積み重なる仮置場を間近にみたり、放射能汚染によりシイタケ栽培が不可能となった森林に足を踏み入れたりした経験は、座学では得られない知見を獲得する貴重な機会となった。4グループに分かれ住民に取材した結果を用いて都路地区のPR動画を製作するワークショップでは、地元の方々が驚くほど完成度の高い作品を披露した。

また、真剣に話を聞き出そうとするゼミ生の姿勢に対し地元の方々から高い評価を頂戴したこと、大学祭では地元の方に振舞っていただいた郷土料理を提供する店を構え好評を博したことに触れておきたい。

学生研修記

小林 桃子

地域経済学科 2 年
北海学園札幌高校出身



あれからの福島

震災から7年が経過し、報道でもあまり取り上げられなくなった。私たちは、福島における人々の暮らしや放射能汚染の状態、復興の進捗状況を知るため、避難指示がいち早く解除された福島県田村市都路地区を訪れた。同地区は帰還率が9割と比較的高く、地元愛も強いが、帰還者の多くが高齢世帯で地域社会の担い手不足が深刻化していた。今回の研修を通し、新しい取り組みを始めようという根気強さや、訪問者への温かな対応、都会とは異なる時間の流れを感じることができた。他方で、住民にとって身近な存在であった森林をはじめとする自然環境の回復や地域産業の再建、観光客の呼び込みの難しさを実感した。私は、原発事故の爪痕の深さに圧倒されたが、復興に向けた住民の方々の粘り強い取り組みに一筋の希望をみた。多くの人にこの町の良さを知ってほしい。福島で起きた出来事を決して忘れないでほしいと強く思う。

福島はあきらめない

バスの車窓からみる福島、とりわけ帰還困難区域の光景は衝撃的だった。住居は廃墟と化し、至る所で雑草が繁茂していた。原発事故により、福島県では住居や公共施設などの物的資本が壊滅的な被害を受けた。だが被害はそれだけにとどまらない。原子力災害はコミュニティの崩壊ももたらした。これまで培ってきた文化や伝統、さらに人間関係が崩壊した。一刻も早い地域の復興が待たれるが、復興事業はさして前進していないのが現状だ。そうした中でも、震災以前の福島を取り戻すため、そして未来の福島を守るために尽力する人々がいる。私たちは、その方々に話を伺うべく福島に足を運んだ。住民の方々は放射能問題や風評被害に立ち向かう気概に満ち溢れていた。この方々こそ、コミュニティ復興において不可欠な存在だと感じた。これらの活動を基点により一層、福島の復興と再生が加速化することを願う。

喜多 速斗

地域経済学科 3 年
帯広三条高校出身



1部・2部 平野研ゼミⅠ

参加学生数 20 名



平野 研

地域経済学科
教授



かとう酒店前にて

浜松市におけるフェアトレードタウン運動の調査

研修地：静岡県浜松市

●研修目的

本研修の目的は大きく二つあります。一つは、2017年に浜松市が、フェアトレードを推進する自治体、フェアトレードタウンとして日本で4番目に認定されましたが、国際的認定を実現するまでの市民運動や行政の取り組みについて調査することです。二つ目は、浜松市にある静岡文化芸術大学が国内初のフェアトレード大学に認定されたことについて調査していくことにあります。調査は聞き取り調査を中心に行いました。

研修先・日程

- 7月5日 浜松市消費者センター「くらしのセンター」訪問、浜松市市議会議員訪問（渥美議員、須藤議員）、浜松市国際交流協会（HICE）訪問
- 7月6日 静岡文化芸術大学・下澤研究室訪問、学生サークル（りとりるあーす、タペボラ）訪問、フェアトレードショップ（とまり木カフェ他）訪問
- 7月7日 フェアトレードショップ（ピオあつみ他）訪問、移動日



●総括

フェアトレードタウン認定には、国内認定団体による6つの基準があります。推進市民団体、企業および行政の三者の当事者（マルチステークホルダー）に対する達成目標が制定されています。今回の調査では、市議会や行政機関、店舗訪問、市民団体への聞き取り調査を中心に行ってきました。

ゼミでは、事前学習として世界のフェアトレードタウン運動、および日本での運動について文献などを通じて学習してきました。それを踏まえて、インタビューの依頼、質問状の作成などの準備を行ってきました。主な調査として、①市議会での決議までの過程、②フェアトレード商品取扱店舗の動向、③推進団体主催のイベントについて、という3点についてそれぞれ分担して聞き取り調査を進めていった。その結果、浜松市のフェアトレードタウン運動は行政や市民団体が主導して、認定基準を非常にスムーズに達成する一方で、市民への啓発のイベントや取り組みが十分に行われたと言えない状況にあることがわかりました。浜松市の今後の課題を明らかにしていくことによって、札幌市で進められているフェアトレードタウン運動の問題についても考察していきましました。

また、フェアトレード大学についても、①大学運営サイド、②学生サークル、③大学生協に聞き取り調査を行い、フェアトレード大学憲章作成の過程について調査を行いました。大学でのフェアトレード運動についても考察し、今後の本大学での取り組みの参考にしていくなきかけともなりました。

ゼミ1だけ調査でしたので、フェアトレードの学習などと並行して取り組み、非常に慌ただしい地域研修となりましたが、各自が担当業務に一生懸命取り組んだことにより、一定の成果が得られました。地域研修報告会だけでなく、札幌市の推進団体の主催する勉強会においても、他大学のゼミと一緒に報告を行いました。このような取り組みを通じて、さらなる研究の可能性を見出すことができたと言えます。

学生研修記

藤原 颯

地域経済学科 2年
本別高校出身



堀 七瀬

地域経済学科 2年
北広島高校出身



フェアトレード

フェアトレード を学んでいる私達は今回国内で4番目にフェアトレードタウンとして認定された静岡県浜松市を訪れました。私達は浜松市で、フェアトレードに選ばれるまでに至った経緯や具体的な活動などを、市議会やフェアトレードフェアトレード商品を扱っている企業、個人経営のお店の人々にお聞きしました。この研修の結果、市が一体となりフェアトレードタウンを目指してから、認定されるまでの期間が短すぎたため、市民の認知度が低い現状にあり、団体や企業としてフェアトレードを普及させるために今できることや今後の活動を考えているということがわかりました。そのため、市民に対してどのようなアプローチの仕方をして認知度を上げていくかが大きな課題となるとことです。

写真①くらしのセンター。②静岡文化芸大大学生協。

③イオン浜末志都呂店。④かとう酒店にて。

地域研修を終えて

私たちのゼミではフェアトレードについて学習しています。今回、国内では四番目にフェアトレードタウン、そして国内初のフェアトレード大学となった静岡文化芸術大学を生んだ、という理由で研修先に静岡県浜松市を選びました。

今回の研修で受けた印象は、市民の認知度が低いという印象が一番残っています。なぜなら、今回研修で訪れたほぼ全ての訪問先でフェアトレードタウンになったことでの市民の認知度について伺いましたが、高いと答えていたところはそんなに無かったからです。フェアトレードタウンの規準で、「運動の展開と市民の啓発」という項目があるのですが、ここが弱いのではないかと感じました。ですが、「フェアトレードタウンとなったことでこれから広めていく」と仰っていました。フェアトレード商品は素材が良いものが多いのでこれから広い層にも広まっていった欲しいです。

1部 古林英一ゼミⅠ

参加学生数 11 名



古林 英一
地域経済学科
教授



乗船前の集合写真

野生生物の保護と鳥獣被害に対する対応の実態を学ぶ

研修地：えりも町

●研修目的

生物多様性の保全に関する社会の関心が高まる一方で、野生鳥獣害による農林水産業への被害が社会的問題となっている。えりも岬周辺に生息するゼニガタアザラシによる被害の実態と共生の試みをそれぞれの立場の人たちから学ぼうというのが本研修の目的である。

研修先・日程

- 9月12日 えりも岬でアザラシの観察
自然保護官による講義（自然保護官事務所）
漁業関係者との懇談
- 9月13日 サケ定置漁船に乗りアザラシによる食害の見学
えりも町郷土資料館で地域の歴史や産業の学習

写真①襟裳岬ゼニガタアザラシ生息エリア。②漁業者による漁具の解説。③サケ定置漁業の網起こし。④サケの選別作業。



●総括

幕末期からの入植以来、長年にわたり、ゼニガタアザラシを捕獲しその毛皮や肉を利用してきた。その結果、アザラシの生息数は大きく減少し、絶滅が危惧されるようになり、保護活動が開始された。保護活動の成果で、現在ではさしあたり絶滅の危機はなくなっている。

だが、その一方で、サケの回遊量が減少していることも相まってアザラシによる漁業被害が深刻化している。えりも町の漁業者は長年アザラシとともに生きてきたという意識をもって、漁業とアザラシの共生の道を、環境省などと共に模索している。

地元の人たちが自身が主体となって、保護と共生をはかろうとしているところに、この地域の特徴がある。漁業者を始めとする様々な立場の人たちから生の声を聞くとともに、実際に、漁船に乗り、食害の実態を見聞することで、野生鳥獣と人間社会の共存の困難さと可能性を学ぶことができたと思われる。

学生研修記

漁師とアザラシの共存



小関 隆太
地域経済学科 2 年
札幌大谷高校出身

今回私たちは「鳥獣害」をテーマにえりも町に行きました。ゼニガタアザラシによる食害について事前に学習し、被害の実態などを知ることができました。えりも町に足を運んで漁師の方々と環境省の人たちと懇談会をしました。実際に話をしてみても被害は受けているがそこには「共存」という漁師の方々の強い思いが感じられました。しかし被害が増えていく一方で対策を取らなくてはいけないのが現実となっています。

今回の活動を通して「共存」について深く考えさせられました。野生動物である為管理は厳しいが1つの命を無駄にしたいくないという漁師の方々の気持ちがあります。私たちは昔から動物に生かされて生活していることを理解していかなければならないと実感することができました。実際に漁船に乗りアザラシによる食害を生で見ることができ、またアザラシも近くで見れたので非常に貴重な体験になりました。

アザラシの保護と漁業被害



西田 瑛
地域経済学科 2 年
岩内高校出身

今回私たちは地域研修でえりも町にいきました。えりも町では、アザラシによる鳥獣害被害と漁師などの地域の人との関わりについて学んできました。

まず最初に襟裳岬に足を運び、襟裳岬から望遠鏡を使って野生のゼニガタアザラシを見ることができました。バスでの移動の道中えりも町の歴史や、むかしのアザラシの活用方等を聞きながら移動し、次に環境省の方の話を聞きに、環境省えりも事務所を訪れお話を聞きました。PowerPointを使いながらアザラシによる被害やその対策法、絶滅危惧種となったときの保護政策、現在の個体数調整の方法等々について話していただきとてもためになりました。その後、一度宿に荷物を置きに行き、すぐに出発して漁師の方々と懇談会に向かいました。そこでは、昔からのアザラシとの関わり方、共存の考え、昔からアザラシによる被害は出たが鮭の漁獲量が多かったため気にしなかった等のお話を聞くことができ、私たちからの質問も真摯に答えていただき、えりも町の漁業の実態を知ることができました。ここまでで1日目の日程が終了し宿に帰りました。2日目は早朝にえりも漁港にて漁師のこんぶ漁や捕獲されたアザラシを見学し、その後朝食を食べてからえりも町の郷土資料館へ移動し、そこでえりも町の歴史について施設を見学しながら話をいただきました。その後、えりも漁業に戻り今度は鮭漁に同行させていただき、その場を見学することができました。そこでアザラシによる被害を目の当たりにすることができました。ここまでで2日間の地域研修が終了しました。

今回の地域研修で、被害が出るからアザラシを処分して個体数を減らし被害を減らすということはせず、アザラシとの共存を目指す地域で、その実態を見ることができてとても勉強になりました。

1部 古林英一ゼミⅡ

参加学生数 12 名



古林 英一
地域経済学科
教授



語り部の南さんと

水俣病の教訓と現状を学ぶ

研修地：熊本県水俣市

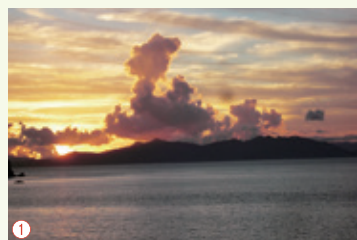
●研修目的

水俣病をはじめとする公害問題は中学・高校で歴史上の事件として学ぶが、水俣病は決して過去の話ではなく、今もなお解決していない問題であることを知り、この問題の現状と到達点を学ぶことを研修の目的とした。

研修先・日程

- 8月31日 現地に集し、水俣の海と景観をみる。
9月1日 水俣市立水俣病資料館で水俣病の歴史と現状についての学習
語り部（水俣病患者）の講話による学習
企業城下町水俣を見学。

写真①水俣の海夕景。②語り部南アユ子さんの講話。
③水俣病資料館の見学。④水俣湾理め立て地。⑤チッソ工場。



●総括

四大公害の現場から遠い北海道で生まれ育った多くの学生にとって、水俣病は歴史の教科書で習う過去の話でしかない。しかしながら、実は、今もなお水銀中毒により苦しんでいる人がおり、また、水俣条約にみられるように、この問題は世界的な問題でもある。

過去の話としてしか捉えていなかった問題が決して過去の話ではなく、また、それが現代への教訓であることを知り得たことは大きい。昨年の四日市に続き、今回の水俣訪問はさらにそうしたことを深く学ぶことになった。

また、地域社会の構造や水俣病患者を含む地域住民の感情を知ることなく、外在的かつ観念的に責任云々を言いつのることの浅薄さと、公害問題によって提起された問題の複雑さと根深さを、語り部の話を聞き、町を歩くことにより学ぶことができたのではないと思われる。

学生研修記

水俣で学んだこと



白山 和樹
地域経済学科 3 年
北見白陵高校出身

私たちのゼミでは四大公害病について、日々勉強しました。今回の地域研修では、熊本水俣病について学ぶために、九州まで足を運びました。私たちは地域研修に行く前に、かなり詳しく水俣病について勉強し、水俣病の症状や発症した経緯、さらに当時の社会情勢や訴訟関係まで深く学んでから、地域研修に向かいました。そんな中で、私たちは「実際に見て、聞いて、学ぶ」ということにコンセプトを置いて、学びました。

現地の旅館に着き、旅館の窓からは本当に綺麗な海が一望できました。そこで、ゼミ生みんなで泳ぎに行き、汚水が流れ出た汚れた海という認識を覆されました。夜ご飯では、水俣で取れた魚介類を食べて、水俣病とは過去の事象と感じました。しかし、水俣病資料館にお邪魔させていただき、水俣病被害者として、現在も語り部をされている南アユ子さんにお話を聞かせていただいて、水俣病はまだ続いているという事がわかりました。南さんが最も強く仰っていたことは、何代まで続くのかということでした。南さんのお子さんは胎児性水俣病であり、胎児性水俣病とは母親の胎盤から胎児へと水銀が流れてしまい、産まれてくる子供も水俣病になってしまうことです。

日本が高度経済成長の時に起こった公害問題で、今も苦しんでいる人が居るというのが現状です。私たちは、過去に起こった公害問題を過去として捉えるだけでなく、未来へとつなげることが最も重要であると考えました。実際にカンボジアのような途上国で水銀の問題があることがわかり、今回学んだ内容をもとに問題提起することで被害を少しでも少なくすることが、水銀公害の知識を持つ私たちの義務であると感じました。

環境モデル都市水俣



本田 祐也
地域経済学科 3 年
札幌東陵高校出身

私たちのゼミでは、昨年から四大公害病について学習してきました。今回の研修では水俣病が発生した熊本県水俣市に訪れました。水俣病について私たちが中学・高校で学んだ水俣病についての知識はただ「公害で多くの方が亡くなった。」という事実の断片でしかなく、過去の話であるという認識だった。しかし、実際には水俣病で悩まされている患者は未だに存在し、そしてこれからも水俣病が発症する可能性があるということを経験して学びました。

その上で私たちは、「水俣病の過去と現在と未来」をテーマに熊本県水俣市へ実際に足を運びました。水俣病資料館では過去の悲惨さを物語るような写真が数多く展示されており、水俣病患者である語り部さんからもお話を伺うことができました。それから、私たちは実際に水俣市の街並みや海を見て歩き、とても綺麗で公害のイメージがある街とは思いませんでした。水俣市と聞くと公害のイメージがありますが、そのイメージを払拭するために水俣市ではゴミの多量分別などを実践し、今では環境モデル都市にも選ばれています。水俣市は公害があった街という負のイメージが根付いていますが、実際は札幌よりも環境に配慮した街ということがわかりました。自分の目で見ないとわからないことがあると実感し、研修は良い経験になりました。

1部 水野谷武志ゼミⅠ・Ⅱ

参加学生数 21 名



水野谷 武志

地域経済学科
教授



寿都町役場にて

ふるさと納税制度によるまちづくりへの影響

研修地：寿都町・岩内町

●研修目的

ふるさと納税制度をまちづくりにうまく活用している自治体もあれば、そうでない自治体もある。ふるさと納税制度がまちづくりにどのように活用され、そこではどのような問題があるのかについて、寿都町と岩内町を事例として、具体的に検討することを本研修の目的とした。

研修先・日程

- 9月3日 道の駅「みなとま〜れ寿都」で昼食と視察、寿都町中心市街地を町歩き、寿都町役場にて職員と意見交換会、水産加工会社「かねき南波商店」を視察
- 9月4日 寿都町総合文化センター内の寿都町文化財展示室を視察、北海道指定有形文化財・カクジュウ佐藤家を視察、そば処「鯨御殿」で昼食と視察
- 9月5日 寿都アンテナショップ(ニセコ町)を視察、岩内町郷土館を視察
- 9月20日 ゼミ生選抜5名が岩内町役場を訪れ職員と意見交換会

●総括

本研修から言えることは、第1に、ふるさと納税返礼品として、魅力的な海産物を用意し、返礼品を全国規模で検索し申込ができるウェブサイト(ふるさとチョイス)などを通して効果的に宣伝していることである。第2に、ふるさと納税制度による寄付額がまちづくりの貴重な財源となっていることである。例えば風力発電の盛んな寿都町ではその施設維持に、また「怒涛祭り」で有名な岩内町ではその壮大な花火大会の開催に活用されていることがわかった。第3に、返礼品を納品する業者と自治体との信頼関係の大切さである。良い信頼関係を築くために、自治体職員が返礼品納入業者とのコミュニケーションに努力を払っていることがわかった。

このようにふるさと納税制度の積極的な側面を学ぶことができた一方で、難しい問題があることもわかった。それは、ふるさと納税制度は国の制度であり、この先もずっと同じ形で続く保証はないという点である。そのような不安を持ちつつも、すでにこの制度による寄付金が自治体の貴重な財源となっているのが現状である。長期的な視点が必要である「まちづくり」にとって、現状のふるさと納税制度を今後どのように活用すべきかは自治体にとって大きな課題である。



寿都町の弁慶銅像

学 生 研 修 記

船曳 百音

地域経済学科 3 年
富良野高校出身



穴澤 悠真

地域経済学科 2 年
北海学園札幌高校出身



地場産品を活かした寿都町のまちづくり

私たち水野谷ゼミは、近年、盛り上がりを見せている「ふるさと納税」について学び、どのようにまちづくりを行うのかを考察しました。今回、寿都町と岩内町を調査地としました。私は寿都町について書きたいと思います。

寿都町は小さな町でありながらも制度を有効に活用し水産加工会社と連携しながら旬な海の幸を提供しており、近年では寄付件数を飛躍的に増加させています。

研修での意見交換会では、水産加工会社との連携について「信頼関係を保つために寿都町の職員の方が業者の方へ直接出向いて意見を聞き、提案している」などといった寿都町の職員の方々のまちづくりに対する熱い思いが感じられました。また、寄付者に絵葉書を贈るというユニークな取り組みも行っており、寄付者との繋がりを大切にし、ふるさと納税に依存せず「寿都」を認知してもらうためのツールとして制度を活用していることがわかりました。

岩内町のふるさと納税について

今回、水野谷ゼミではふるさと納税がまちづくりに与える影響をテーマとして寿都町へ、そして地域研修時では日程が合わなかったため後日、岩内町役場へ行ってきました。

岩内町役場では職員のふるさと納税担当の方にふるさと納税意見交換会という場を設けていただき、ふるさと納税の基本的なしくみから広報、運営、運営を行うに当たっての苦悩などについて、パワーポイントを使いながら説明していただきました。ふるさと納税の知名度は徐々に高まってきているものの未だ浸透しておらず、具体的にどういうものか、協力した場合、企業は儲かるのかを伝えるのが難しく、なかなか新規の企業に協力してもらえないことを学びました。それに対する解決策として道の駅でふるさと納税とはどういうものかわかる資料を無料配布していて、その資料を実際にもらいその資料が簡潔でかつ分かりやすかったのが印象的でした。

役場の方に直接話を聞くという事はなかなかなく、とても良い経験となったためこのような機会があればまた行ってみたいと思います。



①



②



③



④

写真①かねき南波商店社長との意見交換会

②カクジュウ佐藤家を見学

③寿都アンテナショップ

④岩内郷土館

1部 宮入隆ゼミ I・II

参加学生数 22 名



宮入 隆

地域経済学科
教授



農協の作業機にて

北海道酪農の現状と課題ー足寄町を事例にー

研修地：足寄町

●研修目的

足寄町を事例に、農協のチーズ加工事業やコントラクター事業のほか、放牧酪農を営む新規参入農家、TMRセンターへ聞き取り調査を行い、酪農経営および支援組織の実態を明らかにし、今後の北海道酪農の課題について考察することを目的とした。

研修先・日程

8月21日	JAあしよろ総務部 JAあしよろチーズ工房
8月22日	JAあしよろ営農部コントラクター 田中牧場（田中淳一さん）
8月23日	釧路TMRセンター

写真① JAあしよろでの聞き取り調査。② TMRセンターのバンカーサイロ。③ コントラクター事業の聞き取り調査。④ チーズ工房での聞き取り調査。⑤ ホテルでの懇親会の様子。⑥ 田中牧場の牛舎。⑦ 農協職員からの聞き取り調査。



●総括

足寄町は、中山間地域という条件不利を抱えながらも、個別経営の規模拡大により、生乳生産量の維持を目指し、他方では、施設型・放牧型という2つの経営方式を共存させ、多様な経営形態で新規参入を受け入れている実態が明らかになった。

このような地域酪農を維持するために、農協は労働力不足への対応や経営の効率化を図るコントラクター事業を実施し、また、飼料生産の高度化のため、TMRセンター設置されるなど、各種取り組みにより個別経営を支援している実態を垣間見ることができた。販売面においては、ホクレンを通じた全道系統共販によって、酪農家の経営安定化に努めつつも、他方で、先進的にチーズ加工に取り組むなど特産品開発も行っている。

事例分析を踏まえ、ゼミ生たちは、以下の点を今後の北海道酪農の課題として見出した。第1に、人材不足を解消するために、担い手の確保だけでなく、酪農ヘルパー等の労働力支援のための多様な人材確保が必要なこと、第2に、系統共販を維持しつつも、同時に、一部の生乳を特産品開発に振り向け、地域酪農のブランド化を実現することで、魅力ある酪農生産と新たな酪農の担い手や人材の呼び込みに繋げる仕組みづくりである。

学生研修記

佐藤 舞奈香

地域経済学科 2年
夕張高校出身



就農しやすい環境づくりの大切さ

私たち宮入ゼミは、足寄町の酪農の現状と課題を探るため地域研修を行いました。事前に酪農について学びましたが、やはり直接現場でお話を聞く事ができ、新たな発見が多々ありました。

JAあしよろでは地域の酪農業やチーズ加工、さらに作業受託を行うコントラクター事業の実状についてお話を聞きました。TMRセンターでは、混合飼料というものがどのように生産されているのか、そして放牧酪農を営む農家さんのところでは、放牧されている牛を間近でみて、経営の特徴を知ることでもできました。牧酪農を営む田中さんは道外からの新規就農者ですが、足寄町ではこのような方が酪農家全体の約2割も占めていることに驚きました。北海道酪農の問題は酪農家自体の減少が最大の課題です。足寄町のように酪農を始めた人が、就農しやすい環境をつくっていく事が大切だということも分かりました。

澤口 和成

地域経済学科 2年
札幌啓北商業高校出身



酪農の実態から課題を見出す

今回の研修で、足寄町酪農には立地条件を活かして多様な経営形態があり、家族経営主体で規模拡大を進めてきたこと、そして課題として、担い手不足による生乳生産量の維持の困難性と、雇用労働力不足による規模拡大の限界があるということが明らかになりました。コントラクター事業の調査においては、牧草などの粗飼料生産に関わる作業をJAが補完しており、農家の負担を軽減していることを知りました。そのような支援作業が増えるなかで、人材の確保と、そのための雇用条件の改善という課題に直面しているということは、職員の方のお話を聞いたからこそ分かったことです。

このように地域研修では、現場に行ったからこそ見てきた「生の現実」がありました。お世話になった皆さんから聞き取ったことを基に、さらに北海道酪農のこれからについて考え、理解を深めていきたいと思います。

2部 宮入隆ゼミ I・II

参加学生数 11 名



宮入 隆

地域経済学科
教授



農家さんの圃場にて

水田農業地域の現状と農協の役割

研修地：南幌町

●研修目的

大規模稲作地域の南幌町を事例に、水田地帯の地域農業の現状を明らかにするとともに、営農指導事業を中心とした地域農業振興に果たす農協の役割、そして地域生活を支える農協の今日の姿を考察することを目的とした。

研修先・日程

8月29日 JA なんぼろ総務部
JA なんぼろ営農部
8月30日 穀類乾燥調製施設 (JA なんぼろ)
野菜集出荷施設 (JA なんぼろ)
JA なんぼろキャベツ部会

写真① JA なんぼろ本所での研修。②米穀集出荷施設にて。③ JA なんぼろの集出荷施設にて。④予冷したキャベツとゼミ生。⑤ブロッコリーの選果風景。⑥キャベツ畑。⑦農協施設での聞き取り調査。



●総括

南幌町は道内有数の大規模稲作経営を展開しつつも、減反政策以降は札幌近郊という立地条件を活かして、キャベツなど野菜の産地形成を進め、今日では水稲・野菜複合地域として存立している。

泥炭土壌の多い南幌町では、基幹作物である米において、業務用の主力品種である‘きらら397’の生産割合が40%と高いという特徴を有している。他の地域と同様に、現在も担い手の減少が進行している中で、さらなる規模拡大が見込まれており、米麦・大豆といった土地利用型作物中心の地域農業の維持が課題となる一方、野菜生産においても労働力不足が深刻化している状況にある。

そのような中で、第1に、GPS等の新技術の導入による作業効率の向上、キャベツ生産における生食用から加工・業務用需要へのシフトによる省力化といった農協による経営支援が重要になっていること、第2に、販売事業を中心に、農協が状況変化に合わせて産地を再編することで有利販売を実現していることを明らかにした。また、農協が農家だけではなく、総合事業により地域住民の生活を支え、必要に応じて自治体とも連携しながら、総体として地域生活と農業の双方で大きな役割を担っていることも学生たちの関心を引いた。

学生研修記

片岡 李奈

地域経済学科 2年
北海高校出身



新しい技術の活用によるこれからの農業

私たちは水田農業地域の現状と課題を明らかにするため、JA なんぼろを中心に聞き取り調査を行いました。

南幌町は大規模稲作地域ですが、減反政策以降は米と野菜の複合経営を中心に発展してきました。聞き取り調査からは、やはり地域農業の最大の課題は、高齢化による担い手不足と、規模拡大に伴う労働力不足だと実感することとなりました。しかし南幌町では、これら課題に対し、機械化や新技術の活用により、農業の効率化に取り組んでいることがわかりました。それは、大規模圃場で行う稲作を中心とした土地利用型作物において、大型機械やGPSを導入して効率化を進める一方で、余った労働力を野菜生産に活かしていくというものでした。

農業におけるICT等の新技術の導入が、南幌町農業の魅力となって、それにより若い人材が集まることになれば、担い手不足も解決できるのではないかと思います。

北海道農業の活性化のための課題

私たちは「水田農業地域の現状と農協の役割」をテーマに掲げ、南幌町で調査を行いました。南幌町は大規模稲作地帯であると同時に、都市近郊という立地を活かしてキャベツやブロッコリーなど野菜を生産し、道内はもとより全国に出荷しています。キャベツ部会の部会長からは、部会での高品質化のための取り組みや、産地ブランドの確立など多くのことを学ばせて頂きました。また、米や麦の集出荷施設である「米夢21」では、選別や保管方法など普段みることのできない産地の取り組みをみる事ができました。

南幌町では、高齢化と労働力不足が地域全体の課題であり、それらを克服していくために、役場と農協が連携して機械化など先進的な技術の導入を進めています。このような取り組みが、南幌町だけでなく、全道各地で行われることで、北海道農業の活性化に繋がるのではないかと思います。

1部 山田誠治ゼミI

参加学生数 12 名



山田 誠治
地域経済学科
教授



本学ゼミ教室にて

札幌のナイトタイムエコノミーの可能性について

研修地：札幌市

●研修目的

近年、日本のインバウンド観光需要の高まりに対応してナイトタイムエコノミーが民間からも行政府でも注目されている。そこで、札幌の歓楽街すすきのを参考材料に盛り場での消費、夜の街歩き、ショッピングなど、ナイトタイムエコノミー実態と課題について調査した。

研修先・日程

10月26日	すすきの観光協会への聴取依頼（実現せず）
11月19日	すすきの「キングムー」への聞き取り調査
11月20日	すすきのを東西に分かれて、店舗調査

写真①インバウンド向けではないカラオケ店。②多くないすすきのダンスホール。③キングムーの企画。④キングムーの入口。⑤キングムーの看板。⑥キングムーでインタビュー。⑦すすきの交差点は夜の街の顔。



●総括

世界的な観光ブームの中、その開発が注目されているナイトタイムエコノミーをテーマとし、インターネットや足を使っでの調査によって、ナイトタイムエコノミーの成功として挙げられている成果について調べ、成功に至っていない国・地域は、なぜ成功していないのか、ぶつかっている課題を見つけ、ある程度ナイトタイムエコノミーに対する理解を深めることが出来たと思う。

また、研修場所として選んだ札幌の歓楽街すすきのでは、実際に「KINGXMHU」などを取材し、わずかではあるが実情と課題を知ることができた。

さらに、すすきの街頭調査として街へ飛び出し、夜間の外国人の消費行動観察、外国人の受け入れに積極的と取れる店舗の調査、インタビューを試みた。

結果としては、事前に調べた予想した通りに「KINGXMHU」においては外国人の利用率が高いことが確認できたが(特にハロウィンや雪まつりシーズンなどのイベント時)、飲食などでは必ずしも外国人受け入れに積極的な店舗は多くなかった。課題として、魅力的な観光コンテンツの開発、訪日外国人旅行者へのマーケティングの展開、詳細なニーズの調査、国内外への情報発信の強化、そして「モノ消費」から「コト消費」への進化の必要性などについて学生たちは考えたようだ。

学生研修記

伊藤 諒映

地域経済学科 2 年
旭川東栄高校出身



インバウンド対応している「KINGXMHU」

諸外国のナイトタイムエコノミーで最も活況を示しているのがダンスホールである。すすきのの数か所のダンスホールの中で、道内最大のホールである「KINGXMHU」を訪問し、直接その現場を体験してきた。

外国人が来ることが想定されていたが、当日は白人と黒人の 3 人組グループと出会うだけであり、それ以外は大学生が多かった。従業員の方へのインタビューでは、雪まつりなどのイベントがある日には、外国人の入場者数は相当な人数になるとのこと、しかもアジア系の外国人が多いとのことでした。

今後に向けては、外国人にとってはダンスホールが直接の目的でなくとも、観光巡りの一連の行動の中で位置づけられ、実際、この場所の周辺のエリアでは外国人が多く散策しており、そうした流れの中に組み込まれる工夫が必要と思われた。インタビューなどで直接のニーズも調査できればよかった。

川口 空耶

地域経済学科 2 年
北見柏陽高校出身



インバウンド受け入れはまだまだ

すすきの観光協会はなかなか全貌を把握していないことから、調査そのものは直接すすきのの街頭から調べることに、全体像がわかる調査ができなかったことが残念だった。

私たちは、すすきのの東側の地域での外国人受け入れに積極的な店舗と街頭の観察調査を行ったが、英語表記や外国人向けのメニューなど全体的には外国人向けに対応している店は少なかった。これはすすきの飲食店が中心になっていることが一つの原因と考えられ、他方の狸小路では、ドラッグストアでの外国語表記・積極的なカード対応など、商品販売での外国人向けの活況とは対照的な構図であった。しかし、その狸小路は、深夜まで営業していることもないので、全体としてこの地区は、外国人向けのナイトタイムエコノミーの機能としては、まだまだインバウンドに関しては十分なものではないと思った。



1部 山田誠治ゼミⅡ

参加学生 15名



山田 誠治
地域経済学科
教授



ログホテル・ザ・メープルロッジにて

岩見沢市の観光による地域活性化について 研修地：岩見沢市

●研修目的

岩見沢は観光地としてはそれ程知名度は高くないので、拠点になるスポットの開発とその岩見沢域内ではあるが広域的な連携による観光振興を模索している。地域のブランド力がどのように高まるかの工夫について、この研修では現場の状況と課題を聞きながら探ることとした。

研修先・日程

10月26日 宝水ワイナリー訪問・代表取締役 倉武美社長から解説
ログホテル ザ・メープルロッジ
いわみざわ公園バラ園

写真①宝水ワイナリーの倉内さんから解説。②ログホテル・ザ・メープルロッジ～自然に囲まれた素敵な宿。③自然のコンセプトに合わせたロッジ風ホテル。④メープルロッジで休憩。⑤いわみざわバラ園の植物園。⑥バラ園の田中さんから説明を受けながら見学。



●総括

宝水ワイナリー訪問・代表取締役の倉内さんからは、ワイン造りを育て、それが地域ブランドとしてどう広がっていったか、またブドウ栽培そのものの苦勞についての説明を受けた。次に、ログホテル・メープルロッジの訪問では、総務営業マネージャーの松本さんから、その施設のコンセプトの説明を受け、それぞれの施設も回って、学生の理解は、事前に持っていた情報よりは感銘を受けたようであった。いわみざわ公園バラ園でも、サブマネージャーの田中さんから施設を回りながら説明を受け、その規模と内容は、想像以上に大きいことも理解できたと思う。

こうして、それぞれのスポットの魅力やその展開内容については理解できたが、やはり本題である岩見沢全体の観光の知名度を上げることについては様々な課題があり、岩見沢市もDMO組織を設け、展開しようとしている。広域観光については、いろいろな課題があることにも気付いたと思う。例えば、回った三か所の施設もそれぞれ観光客層が異なり、また連携についてもそれほど強くないと思われた。

9月にゼミで訪問した東京ビッグサイトでのツーリズムEXPOでは岩見沢市ブースでのプレゼンの迫力を実感し、この熱意をさらに広げていく施策が必要だと学生は思ったようだ。

学生研修記

齋藤 夏樹
地域経済学科 3年
札幌北陵高校出身



地域ブランド化の難しさを実感

岩見沢の宝水ワイナリーを見学した。道内のワインの産地としては、余市・小樽・富良野に次ぐような地位であるが知名度としてはこれからであり、実際、直接訪問して施設とかは小ぶりであり、それほど規模ではなかった。ワインを試飲してみるとその味はすばらしく、この点で、もっと情報発信を強化しイメージをさらに広げる必要があると思った。また映画「ぶどうのなみだ」の影響は大きかったようだが、その後の広がりを見ると、岩見沢としての観光の宣伝と地域ブランド化の難しさも感じた。

私たちのゼミでは、9月に東京で行われたツーリズムEXPOも見学し、そこで岩見沢の方がアピールしている会場にも訪れたが、その際の印象は岩見沢の観光資源は強く自信が持てる、という発信だったと印象付けられ、やはり岩見沢全体としてのアピールと個々の要素の充実の相乗が必要だと思った。

鈴木 海音
地域経済学科 3年
札幌龍谷学園高校出身



メープルロッジの今後の戦略を考える

岩見沢の宿泊観光の拠点となるログホテル ザ・メープルロッジを訪問した。この施設は、以前地域の温泉施設であったものを改築し、岩見沢の広大な自然を生かし、カナダ産の丸太をふんだんに使用したログハウスにレストラン、温泉、コテージを備え、ある意味岩見沢観光の戦略の中に位置づけられた施設です。少人数のグループ向けに高級感もだし、質の高いキャンプ場であるグランピングなどにも対応し、周辺の観光スポットとの競争の中で差別化を図っていると言えます。

岩見沢観光はまだまだ日帰り観光が多く、また冬の降雪量も多いこともあるが、逆にこうした土地柄の特性を生かした施設として、どこに資金を投入し、それぞれの階層の観光客がどう楽しめ、どういう方向で戦略を展開すべきか、さらに考えることが課題だと思った。



地域研修報告会 | 2018年11月24日・12月1日 40番教室、50番教室、16番教室

総勢で23ゼミ（地域研修実施21ゼミ中2ゼミにおいて、発表が2報告分増えた）が2日間に分かれ、3つの教室で発表しました。報告会では、それぞれのゼミが事前学習と現地調査の結果をまとめ、そこから得た成果と課題について発表しました。各ゼミの発表に対して、出席した教員や学生から質問や講評が出され、意見交換を行いました。

◎11月24日 報告ゼミ順序と研修地

●40番教室 コメンテーター：浅妻先生（司会）・川村先生

①古林ゼミⅠ（えりも） ②水野谷ゼミⅠ・Ⅱ（寿都・岩内） ③2部浅妻ゼミⅠ（安平・小樽） ④大貝ゼミⅡ（洞爺湖）

●50番教室 コメンテーター：宮入先生（司会）・中園先生

①浅妻ゼミⅠ・Ⅱ（津別・小樽） ②2部宮入ゼミⅠ・Ⅱ（南幌） ③中園ゼミⅠ（札幌） ④古林ゼミⅡ（水俣）

◎12月1日 報告ゼミ順序と研修地

●40番教室 コメンテーター：西村先生（司会）・佐藤先生

①濱田ゼミⅡ（上士幌） ②2部内田ゼミⅠ・Ⅱ（平取） ③佐藤ゼミⅠ・Ⅱ（帯広・音更） ④西村ゼミⅠ・Ⅱ（豊頃） ⑤山田ゼミⅠ（札幌）

●50番教室 コメンテーター：平野先生（司会）・内田先生

①内田ゼミⅠ・Ⅱ（平取） ②2部濱田ゼミⅠ・Ⅱ（歌志内） ③川村ゼミⅠ（札幌） ④1部・2部平野ゼミⅠ（浜松） ⑤宮入ゼミⅠ・Ⅱ（足寄）

●16番教室 コメンテーター：早尻先生（司会）・徐先生

①川村ゼミⅡ（札幌） ②徐ゼミⅠ・Ⅱ（旭川） ③濱田ゼミⅠ（上士幌） ④早尻ゼミⅠ・Ⅱ（田村） ⑤山田ゼミⅡ（岩見沢）

●報告会の準備



● 報告会当日



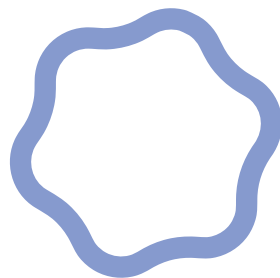


北海学園大学 経済学部

地域研修報告書 2018



写真上から1部大貝ゼミⅡ（洞爺湖町）、1部西村ゼミⅠ・Ⅱ（豊頃町）



北海学園大学 経済学部

〔経済学科・地域経済学科〕

〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号

TEL：(011) 841-1161（内線2222）

<http://hgu.jp/>

<http://econ.hgu.jp/>

2019年3月発行

制作(株)ラボット